ROSETTA

蒔能兎珠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＯＳＥＴＴＡ

【Ｎコード】
Ｎ６２８３Ｏ

【作者名】
蒔能兎珠

【あらすじ】
――目を開いて？　お嬢さん――――声が、聞こえた。　何がどうなったのか、真由美は超金持ち校に来てしまった。（か、感覚が他の人と違う！　たくさんの意味で……）一応真澄は付いて来てくれているものの……　声が、聞こえた。――――世界はこんなにも、美しい――――　悪魔のような……

i（前書き）

少々（？）未来の事です。

i

「って、どーゆー事ですかっ！？」

真由美は激怒した。

「なんで、そんな所に……。うちにそんなお金無いんですってば！」

櫻樹学園高等部。世界随一のお金持ち学校に。

「奨学金援助が受けられますよ、片岡さんの学力なら。全寮制ですし、生活に不自由は無い筈です。それに…」

教頭は一瞬黙ってから声を潜めて続けた。

「実を言うと、むこうからの推薦なので。断られると困るんですよねぇ…」

真由美はだんだんと脅されているような気分になってきた。

「でも…、そんな所に1人で、なんて……」

行きたくない訳ではない。真由美の興味のある学部はあるし、施設も充実している事も確かだ。それでも、

「女の子に無理強いはどうかと思うぜ、クソ爺ィ」

久し振りの、懐かしい声が扉から響いてきた。口が悪い筈なのに、人前では最強の猫被り。

「よお、真由美。久し振りだな」

目崎真澄だ。彼女は1年間、ドイツに留学していた。

「スミ！？　おかえり！！」

真由美が思わず抱き付くと、背の高くなった真澄も抱き返す。

「ん、ただいま。元気そうだな。……で？」

最後の1音で声色も口調もガラリと変え、真澄は教頭に向き直った。

「面白ぇ事やってくれんじゃねぇか。どうオトシマエつける気だ？」

「め、目崎さん？　何ですか、その淑女にあるまじき発言は」

常に数匹の猫を被り、優等生と化している真澄しか見た事が無いのなら、当たり前だ。

教頭は明らかにビビッている。

真由美は彼女の背にまわった。

「あ゛？　誰がレディだ。テメーが何をしたのか忘れっちまった訳じゃあねーだろなッ！！」

忘れたんなら言えよ脳味噌抉ってやっからよ、と真顔で宣告する真澄。

（何をしたか知らないけど、スミを甘く見るからそうなるんだっ！）

それを蒼ざめて見る教頭に、真由美はざまーみろ、と心の中で笑った。

「それで？　マユはどうしたいんだ？」

再び口調を変え、真澄は自分の背中に聞いた。

「あ、うん…。櫻樹に行けって言われたんだけど…」

「奨学金は貰える筈だよな。行きたいんだろ？」

真澄は軽く言い当てる。

「な、何で？」

「特殊現象研究部。日本には櫻樹にしかなかったよな？」

真由美の事を相当見ていたようだ。

「でも、1人じゃ行きづらい、と」

「……うん」

というか、読心術でも使うのか？　と真由美は思った。

「なら、オレがついて行く。それで解決だろう」

真澄が言った途端、教頭。曽根川がバッと顔を上げる。

「無理だ。奨学枠はすべて埋っている。君は入れない！！」

「そうか？　櫻樹…いや、現究と外会はオレを欲しがるだろうが」

何なら帰国子女として追募試験でも受けてきてやろうか、と真澄は言った。

留学する前、彼女は真由美より下の成績を取ったことが無い。

「……わかった。連絡しておく」

「必要ない。自分のことくらい自分でできるさ」

真澄は左手に荷物を持ち、右手で真由美の肩を抱く。

「……曽根川、悪いことは言わない。河川公からは手を引くべきだ」

彼が、真澄の言葉にどう反応したのか、真由美には見えていなかった。

i（後書き）

○登場人物○

『片岡（かたおか）　真由美（まゆみ）』　２０１５年１１月１２日生まれ、女性。東中出身、高校入学時身長１５３ｃｍ？

『目崎（めざき）　真澄（ますみ）』　２０１５年０５月１６日生まれ、一応女性。東中出身、半年ほどドイツに留学していた。身長は１６５ｃｍ前後？

○単語帳○

『櫻樹』　物凄いお金持ち校。でも学力重視。高等部はＩ、Ｊ（各２０人）が特進クラスで、日本の秀才と東アジア圏の超秀才が奨学金をもらって入ってきます。

『河川』　よく解らないけど敵（ｂｙ真由美

ii（前書き）

どうにでもなれ。

彼ら（の一部）は超能力が使えます。

ｉｉ

［Ｏｈｊｕ－Ｈｉｇｈ　校門前集合。／す］

真澄からのメールを何度も確認しつつ、真由美は櫻樹の校門にたどり着こうと努力していた。

（ってか、何でこんなキラッキラした奴らばっかりなの！？）

なかなか、校門前にたどり着けない。

さすが金持ち、あと約１００メートル。

その時、

「何コレ。奨学生？」

頭の上から声が響いた。

襟の校章から察するに、上級生だろう。

「ちょっと通してくれない？」

嫌味な笑顔で言われた。

「あ、はい。すみません」

真由美は後ろに下がって大きく右、歩道の中頃まで避ける。

が、

「通してよ。邪魔」

歩道に乗り上げて、ピカピカのワーゲンが背後に滑り込んできた。
頭を下げて、更に右に避ける。
それでも、器用に植木を避けつつ、車はまだついて来ている。

「邪魔」

（やっっばいぃ！　どうしよう！！？）

真由美が珍しく文句をつけ損ねてしまう、それ程までに動揺し、
もう無理だと思った、瞬間。

ブロロロロロロロロロ！！！

轟音（？）が周囲に居る者の耳に響き頭に響く。
『上級生』が怯み、車が停まる。
真由美が抱き上げられ、馬上ならぬ車上の人となったのと、ほぼ
同時だった。

「ドーラン！　てめ女の子に何してやがんだ！！」

さほど低くない男声が、真由美の頭の後から飛んだ。

「っ！！　下級庶民（無能力者）如きが俺の名を気安く呼ぶな！！」

動揺丸出しの『上級生』に、後の彼は流さず突っかかる。

「悪かったな無能力者でよッ！　するとその『無能力者』を特研が２０年も追い回す理由は何だ！」

『特研』――――『特殊能力研究会』と聞いて、二人が反応する。

「バイク…セシルヴォーグか！？」

「何だよお貴族様。下級庶民（無能力者）の名なんぞ呼ぶのか？」

セシルヴォーグ――――『Ａ　Ｆｅｗ』の分解者にして構築者、だ。

「す、すみませんでした。ご本人とも知らず、無礼な口利きを」

「ふん、成金坊主（おぼっちゃま）は次は何をお求めかな？」

コロッと態度を変えた『上級生』が気に入らないらしく、彼、セシルヴォーグは更に言う。

（こ、この人かなりいい性格してるんじゃ…）

真由美がそう思ったことは、彼は知らない。

「…謝罪、致します…。何なりと……」

今のはどうやら敗北宣言だったらしい。

「なら、まずそこのボロクソワーゲンよけやがれ」

「ぼ、…」

思わず真由美が振り向くと、黒髪黒目の、いかにも日本人の配色が目に飛び込んできた。

「あんだよ文句あんのか？　俺はボロよりベンツ、車よりバイクだっ」

まあ1番は葵（あおい）とコーラだけどな！　と言いつつ、彼は目力で『上級生』を動かしていた。

『上級生』はワーゲンに飛び乗ると運転手に何事か言いつけ、そのまま悪役の如く去っていった。

「ちっ、いじめ（軟弱者）甲斐のない奴め」

残念そうに言う彼は、野次馬の一角に目を留めた。

「おいエディ！　見えてるぞ、出てきやがれエドワード！！」

「あの、ありがとうございました」

降りようとする真由美を、ちょっと待ってくれと彼が引きとめた。

「悪ぃ、あと1つ釘刺すトコがあんだよ」

「私のことなら必要ありませんが？」

呼ばれて進み出てきたのは、

「スミ！？」

真澄だった。

ｉｉ（後書き）

○登場人物○

『ドーラン』　男性。
櫻樹高２年の特進生、実は韓国籍。

『セシルヴォーグ』は、次書きます。

○単語帳○

『特殊能力研究会』　略して『特研（とっけん）』。超能力とか、魔法（？）とかの研究その他諸々やってます。

『Ａ（ア・フュー）　Ｆｅｗ』　皆そう言うが、正式には『一Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｆ（アナ）ｅｗ（ザー・フュー）』。「東の遮夢（シャム）に西のＡ　Ｆｅｗ」と、日本の裏世界（？）を２分する勢力を持つ。

真澄のメールの「す」は、一応署名みたいなもの。「まゆみ」と「ますみ」の、「ゆ」と「す」だけ違うから。

ｉｉｉ（前書き）

えーっと。
地球以外にも住める星がある、ということで。
人間以外にも住んでいる種族がいる、ということで。
知らない言語もい――――っぱいある、ということで。
これはＳＦ？　それともファンタジー？

iii

「なああにが、必要ありません、だ！自分の客くらい自分で守れッ！！」

セシルヴォーグは真由美を乗せたまま、真澄を怒鳴りつけた。

「仕方ないじゃありませんか。折角行こうとしたのに、あなたが特撮ヒーロー張りの登場で」

私の出番取ったのはあなたでしょう、と言った真澄は、でも、と言って彼の目を見た。

「とりあえず、すみませんでした。確かに私の不手際ですね」

「とりあえず、は余計だっ！が、一応合格。返すよ」

ヒラリとバイクから下りると、ひょいと真由美を降ろし、真澄に押し付ける。

「ひ、人質、だったんですか…」

「…ごめん」

セシルヴォーグは一応謝る。

ちゃんと感情込みで。

彼は真由美の目を見て自己紹介を始めた。

「じゃ、改めて初めまして。俺は土沙悠利。ユーリィ・セシルヴォーグでも通じるかな？」

「あ、えと…片岡真由美です。よろしくお願いします」

「んー、よろしく」
言う彼はほとんど真澄と目線が並ぶ。
「おっと、俺がチビなのは好きでなったんじゃないからな」
気にしているらしい。
真澄がそれを感知して突っ掛かる。
「そうですよね。伸びるんならあと２０ｃｍは欲しいですよね」
「に、２０、って…」
「あなた方の平均身長ってそれ位では？１８０前後」
「や、それだったら１０ｃｍ強でいいから。…そういや修馬も１７９あるらしいな」

でーでん♪

ケータイの、着メロ。
「土沙さん？何か襲って来たようですが」
「修馬が襲って来たんだ！…これは奴の恐ろしさを表現した音楽なんだ」
（「修馬」さんってすごく怖い人なんだ…）
真由美は３０秒かっきりに、ジョーズが去って行ったのを確認した。

「３０秒で切れるんですか？」
「んや、合図なんだ」
「それにしても樫さんって、冷静で優しくて大人で穏やかで暖かくて背の高い人だと思ってたんですが」

真澄が言う。
樫修馬がフルネームのようだ。

「表面はな。…オマエはアイツの恐ろしさを知らない。アオですら論駁されるんだぞ？」
「レイディが？」
「そ。おっかねー奴だぜ。昔からスィ・マスで集まって討論してた時から…」

アオ＝レイディだと真由美は認識した。
真澄は「レディ」ではなく、「レイディ」と発音する。

「議題は何です？」
「美しさとは何か。平和を守る手段における戦闘。命の輪廻転生について。地球の有用性。２重スパイの利点。宗教は善か。特研は必要か。オーロラ世界における多種族の位置付け。キスの意味。何を以って賄賂とするか。コーラのおいしい飲み方。なぜアオと俺の背が伸びないのか」

真由美からすれば、ほとんど意味がわからない。

「哲学・心理学的かつ科学的で社会的ですね…最後の２つを除くと」
「最後が重要なんだ、最後がっ！　ところで、今日は日本にアオい生命体が５つ存在するからな」
「５人とも、いらしてるんですか」

「そ、珍しいことに。…って、あおい迎えに行かねーとっ！！」

悠利はバイクに飛び乗る。

直後に、

「…何か、また襲ってきましたね」

でーでん♪

真澄が嬉しそうに（？）言った。

「怒ってるんだ、あおい迎えに行くまでアイツ帰れねーから。…こええッ！」

じゃな、と爆音を巻き起こして、ノーヘルバイクは暴走を再開した。

「…スミ？」

「……っああ悪い、ちょっとボーっとしてた」

複雑な顔をして考える真澄に、真由美は声をかける。

「スミ、あれって捕まらないの？」

「警察や地球保安では無理だろうな。外界組織か、…ああ、四天王なら確実だ」

二人の話は、何気に噛み合っていない。

「とりあえず、入寮手続きを済ませよう。色々と面倒らしいし…」

いくつかの好奇の目の集まる中、二人は「とりあえず」寮へと向かった。

ｉｉｉ（後書き）

○登場人物○

『土沙（とさ）　悠利（ゆうり）』　もしくはユーリィ・セシルヴォーグ。気は若いけれど１９９１年生まれ、男性。
Ａ　Ｆｅｗ所属。同僚（？）のあおい（旧姓忘れましたゴメンナサイ）が嫁。

『樫（かし）　修馬（しゅうま）』　多分１９８４年生まれ、男性。
スィ・マス創設者にして『議長』と呼ばれる論客。

○単語帳○

『スィ・マス』　日本語にすると『如何なる事にも縛られず自由に発言できる世界を能動的かつ行動的に目指す有識な論客による論会』的な事を略したもの。何語かは知らない。討論したり論文書いたりしているグループ。創設は１９９９年？　雑誌とかも出している。
現在、『議長』修馬はじめスィ・マス出身者は悠利（は別としても）、「イヴ」「青猫」「まつり」など、世界的に発言力が凄い。

『四天王』　偉くて強くて凄い人たち。以前は４人プラス５人目で動いていたが、約１０年前に内の１人「夏羽（なつは）」が戦死したため、現在断定４人で活動（？）中。代替わり制。

ｉｖ（前書き）

祝！　友達（？）１人目。

意味が解らない所があったら聞いてください。
ばっちりネタをばらして解説します↑

iv

一学年２００人。
Ａ～Ｊ各クラス２０人。
入学式が終わり、そのＪクラスに2人が足を運んでいた。

「…遠いね」
「太ることはなさそうだな。お貴族共にはちとキツいかもしれないが」

どよんとした顔の真由美と、少し口角の上がった真澄。
『足を運ぶ』という表現が相応しく思えてくるほどの、大きな校舎。

「Ｊに入れてよかったね」
「当たり前だろ。Ｊ以外にオレが入れるクラスなんて無いし」

櫻樹の、Ｊは一応トップだ。

「へえ…って、スミ！？他無理ってどーゆーこと！？Ｊって1番入りにくいんじゃ…っ」
「いや、ちょっとした理由が…って真由！？……っと、すまない」

詳細を聞こう（聞き出そう）と真由美が暴れ出し、その結果、

「いや」

同じ方向に進む彼にぶつかった。
軽く目を向け、さっさと歩いて行った。

「…感じ悪ッ！！」
「そーか？」
「そーか、って、何とも思わないの？」
「いや、非はこちらにあるんだし…。とりあえずの1年で、その意見がどこまで変わるか楽しみだな」
「どーゆー意味！？」
「だから、暴れるなって」

わかんないよー、と真由美は言った。

２人の前に、［ＯＨ１Ｊ］の札が現れる。

「ここ…だよね？」

問う真由美を無視して、真澄は扉を開ける。

「……ぅわ…」

整然と大きめの机が２０、広い教室に並んでいた。

「何か、…金持ちって感じ」
「金持ちに見せる必要は無いが、貧乏臭い田舎者に見せる必要はもっと無いぞ」

テンションの上がりかける真由美に真澄が言った。
「スミって地味に毒舌だよね、失礼だし！」
「地味か？それとオマエの席はそこ」

廊下側の３番目。
机は横に４列しかない。

（少ないなー）

「出席番号、男女関係ないんだね」
「こういうクラスになると男女比が変わってくるからな」

真澄は言いつつ、窓際の２番目の席に座る。
１７番。
電子書籍を読みはじめた真澄にため息をつきつつ、真由美も自分の席に行く。
出席番号３番。

教室は広い。

「～♪…」

人の集まりきらない教室で、真由美は何か異質なものを見た気がした。
濃い焦げ茶の髪に金のメッシュを入れ、長いピアスを付け、椅子に胡座をかいて座っている。
その手元には、

「が、楽譜？」

リード楽器２つ、ピアノ、ベース、ドラムのメモ。
１２段のルーズリーフを上下半分ずつ。

「奨学生？」

真由美の声を聞いて、彼は顔を上げた。

「えっと…一応」

「おっしゃ！」

ダッと椅子を蹴って立ち上がり、彼は真由美の手を取った。

「知り合い第1号だなっ！俺は尾上竜貴（おのうえりゅうき）。地味に奨学生。あんたは？」

「か、片岡真由美です…」

「んじゃ片岡、とりあえず1年よろしくなっ！」

がしっと掴んだ手を上下に強く振る。

握手のつもりらしい。

「あ、はい。よろしくお願いします」

「はーいみんな揃っていますかー？確認するから一旦着席してください！」

ガラッと扉が開いて、1人の女性が入室した。

「揃ってますね。…きみ後向いてまで睨むんじゃない。みんな顔を上げて」

彼女は教卓の向こう側、教壇の上に立って言う。

「みんな、入学おめでとう！　そして、世界のＯｈｊｕ－Ｈｉｇｈ”Ｊ”クラスにようこそ！　私はあなたたちの担任の並木暦（なみきこよみ）です。

担当はＩ、Ｊの語学全般ね。特に英・仏・露。よろしくお願いします」

暦は一礼して自分の生徒たちを見渡す。

「それではまず自己紹介といきましょうか。…中嶋くん、いくら魅力的でもそんなに見つめるのはちょっと失礼じゃない？」

教室に薄く笑いが広がった。

そっぽを向いた彼が睨んでいたのは、真澄だ。

「あなたからスタートね。名前と、…そうね、特に専攻していたり興味がある分野について、あと一言。どうぞ」

暦に立たされた彼は、嫌々ながらに言葉を吐き出した。

「中嶋隼斗（なかしま はやと）、航空と電子情報専攻。以上」

世界が意外に狭いということを知る者はどれくらいいるのだろうか。

ｉｖ（後書き）

〇登場人物〇

『尾上（おのうえ）　竜貴（りゅうき）』　男性。

自他共に認める音楽馬鹿。ミレニズともいう。身長は真澄より気分程度低い。

『並木（なみき）　暦（こよみ）』　１９９２年生まれ、女性。

名前の語呂が微妙とか言われることがあるが、結婚（仕方な）したらこうなった（い）。身長は１６０ｃｍちょっと。

『中嶋（なかしま）　隼斗（はやと）』　男性。

真澄と知り合い（？）。身長は１７４ｃｍ（だったっけ？）。

真澄とぶつかった人、もうすぐ（？）出ます。

v（前書き）

今回短いです。
意味分からないかも知れませんけど……。

v

「スミ〜、お腹空いた〜」

入学式当日に、試験。

さすが特進、とも言うが、皆疲れきった顔をしている。

「ホール行ってみようよ！」

「わかった…オマエ元気だな…」

クラスは今から、遅い昼食タイムとなる。

「過ぎたことは忘れる主義なんだよっ！」

「かーたーおーかーっ！」

がしっと後ろから、真由美の肩が掴まれる。

竜貴だ。

「俺らもご一緒していーか？」

「あ、はい大丈夫です」

「…敬語禁止」

「りょ、了解」

堅苦しいのは嫌いなんだよ、と竜貴が言った。

「んじゃ、お連れさんにご挨拶をば。俺は尾上竜貴。霧ではミレニズ」

「目崎真澄…エドワードだ。尾上竜平（りゅうへい）との接点は？」

「ははっ、バレたか。親父だよ、緑閃光エディ」

霧の輸送者か、と真澄が呟いた。
「そ。こっちは愛洲拓夢（あいすたくむ）と言うらしー」
「…句眼（くがん）のフェイティオか？」
「あ、愛洲って三島中の…」

真由美も知った名前だ。
中１の時から高校の入試模試で常に１桁。
「と、俺も思うんだけど、真相は？」
「…三島出身、フェイティオとも言う。親の籍は句眼だ」
「やっぱ本人か…」
「こりゃ挑みがいがあるな。模試は受けられなかったが統一試験（ワールド）２００点負けしてた」

統一試験（ワールド）は長老会が始めた実技を含む登用試験で、現在ではオーロラでも用いられている。
「スミ、受けたの？」
「去年な。２００点で１桁違ってくるんだぜ？」
「俺も５０点負け。実技受けなかったら割合更に１桁落ちた」
「霧で受けたのか」
「まーな。これでも次秋の本部枠に入ってんだぜ？」

それぞれ将来のこともきちんと考えているらしい。
「真澄、あんたはどこか入る予定は？　後成王宮は一時って聞いたけど」

「ん？　ああ、何か建てられたらいいなと思う」
「マジ！？　中でか？　外へ行く？」
「……メンバーによるだろ。紹介者と」
「あー、まだだぞ？　一応言っておくが」

真由美の眉が中によりはじめた。

「スミ、」
「なんだ？」

ふっと振り向いて、真澄は一歩退(ヒ)いた。

「　お　な　か　す　い　た　ッ！！」

…食べ物の恨みは怖い。
特に女の子は。

v（後書き）

○登場人物○

『愛洲（あいす）　拓夢（たくむ）』　２０１５年生まれ、男性。
三島中出身。頭脳面では最強。文句なし日本一。元々の身長設定は１７１ｃｍ。でももうちょっと低いと思う。フェイティオはあだ名みたいなもの。

『尾上（おのうえ）　竜平（りゅうへい）』　１９９２年生まれ（だったっけ）の男性、竜貴の父親。
『夕霧』という組織に所属する、どちらかと言えばすごい「人」。

ｖｉ（前書き）

お腹すいた！！　と真由美の叫びはあえなく無視され…
気分よくないですけど挨拶のようなもの？

最近入力するのがとてもつらいです…

vi

「広いね！」
「…まあ、学生ホールとしては」
真由美に、拓夢が答えた。
「豪華だなー」
「そりゃ、天下の櫻樹だしな」
竜貴に、真澄が答えた。
「で、」
奨学生もとい一般市民が言う。
「「高いよ（な）」」
「……」
「そりゃ何とも」
食堂ではない。
レストランだ、しかも、高級。
「桁が違うって…」
例えば、シーフードカレーライス、￥２８０００。
「ぁありえねーって！！」

叫んだ竜貴に、一部の視線が集まる。
「さっすが櫻樹」
「かなりの稼ぎがいるな…」
真澄と拓夢が言う。
それを掻き消すかのように、
「ぁあっらー！さすが学生用の食堂ねっ！」
甲高い女声がホールを満たす。
ぞろぞろと女生徒を引き連れて、ドレスを着た女が現れた。
その瞬間、竜貴と拓夢が目を合わせ、立ち上がる。
「お、俺ら先に図書館行ってくるから！」
『腐った奴が消えたらそっちに行く』
『了解。諦めりゃ良かったのにな』
ドレスの女がキッと顔を上げた。
「通用語？」
「敢えてな。誰でもわかるだろ？」
「腐ったものを目の前にすれば食う気も失せるな。たとえ人間であっても」
声を落として話す2人の耳を、よく通る男声が刺す。
誰かが立ち上がっていた。
「マユ、あいつらとオレのメシ食う気あるか？」

「スミのご飯なら誰とでも！　…どうして？」

いや、でも一旦巻き込むぜ、と言うなり真澄は立ち上がり、一歩前に出る。

「全面的に賛成だ。腐っているものは腐っている」

彼、隼斗は思わぬところから同意を受け、一瞬驚く。
だが言葉は続ける。
日本語で。

「そうだな。不衛生だ。廃棄すればいいものを」
「ははっ、いいこと言うな。オマエさ、オレのところでメシ食う気ある？」

一応レイディのお墨付きだぜ？　と付け加えた言葉に、ドレスがわずかに反応する。

「それもいいかもしれないな。とりあえず、腐ってはいまい」
「当たり前だ。……行こうか」

真澄はすっと真由美の手を引き、立たせる。

「なぜ捨てないのか、不思議だな」
「大いに賛成。気が知れないねっ」

扉へと歩く3人の背に、よくも、と声が投げつけられる。

「よくもっ、このわたくしを…！」
「…へえ、自覚あるんだ」

「やめておけ」

喧嘩を売りにかかった真澄を、隼斗が制する。
真由美としてはやめてほしい。
物凄くヒヤヒヤする。

「このっ、わたくしをっ！！」
「見栄はともかく、女の怒声は美しくないと思うが」

扉の閉まる直前。
3人の背にもう一つの声がかかる。

vi（後書き）

……昼食ありつけず。
ありがとうございました。

ｖｉｉ（前書き）

やっとでました。
そういえば、真澄はいつも帽子を被っています。見えないかもしれない。でも被ってることは確か。理由不明。ハゲ隠しでないことは確か。…同様に、確からしい。

viii

「スミ〜！早く行こー！」

言って先を歩く真由美の耳に、鈍い、壁を打つ音が聞こえた。

「…スミ？」

「……どういうことだ」

真澄が壁に縫い止められていた。

腕で。

「何が？」

薄く笑いを瞳に灯し、真澄は隼斗に問い返した。

「わかっているんだろう！？」

ぱさ、と軽い音をたてて真澄の帽子が床に落ちる。

「さあ？　どうかな」

睨み合う。

剣呑さと、不吉さを貼付けた、笑みが。

オーラで相手を圧倒しようとでもするかのような2人。

を、外から見ると、

「…お2人さん」

真由美が2人の間に割り込んだ。
「やめよ。オーラ見なきゃBLに見える」
ばりん、と音をたてて空間が割れた。
「ははっ、『L』は否定させてくれ」
珍しく力の無い笑みを浮かべて、真澄は帽子を拾った。
「…緑閃光は女で合っているんだな」
隼斗の呟いた一言に、真澄が笑みを引っ込める。
「誰に聞いた！」
「…誰にも」
自分より低い位置から出て来た、胸倉を掴む手を解きつつ、隼斗は言った。
「…そう、か……」
真澄はとんと壁に背を持たせかけ、そのままズルズルと座り込んだ。
「スミ、行かないの？」
「少し待てよ、あいつらって言ったろ？　も1人いるんだ。――オマエも食ってけよ。レイディが絶賛したんだぜ？」
「嘘だろ」
「…絶賛は誇張だ」

「スミ、レイディって誰？」

真由美の言葉に、固まった真澄がぎぎぎぎぎと音のしそうな様子で振り向いた。

ちなみに隼斗の顔は「マジかよオイ…」だ。

「オマエ…櫻樹入るのに、知らなかったのか…？」

「え、有名な人！？」

「J．G．…の方の、『レイディ』だよな……」

「せ、世間一般ではあの人以外をレイディとは呼ばないかと…」

ばっと扉が開き、騒音と共に1人の男子生徒が吐き出される。

「っ、あ――っ！！」

それを見て、真由美が声を上げた。

「今朝の人！」

正確には、今朝真澄とぶつかった人、だ。

ホールは物凄い騒ぎになっているようだった。

「やったな。皮剥いで来たのか」

「お見事。えーと？」

隼斗が声をかける。

真澄がいつもの調子に戻る。

ニヤリと笑った、気がした。

「『こーくん』、だったか？」

ぁあんのクソ猫ォー！　と、『こーくん』こと橋本匡征（はしもとこうせい）の声が廊下にこだました。

ｖｉｉ（後書き）

かわいそうに。また昼食食べられなかった…

○登場人物○

『橋本（はしもと）　匡征（こうせい）』男性。１Ｊクラス委員に祭り上げられてしまった哀れな奴。

背は高い。１７８？　ちょっと《あることで》有名な家の出で、父親が婿に入った。元々はカッコいい奴の筈だった、現在苦労人。

彼女有り。これが原因で、学校でも気が抜けない。理由は後々明らかに（なるはず）。

viii（前書き）

パソコンが入院してます。
これは書き溜め分ですが、大丈夫だったでしょうか……

viii

天下の櫻樹。
敷地が広けりゃ教室も広い。
講堂も広い。
ホールも広い。

「えー、やっぱ階違うじゃない」

もちろん、寮も広い。
１階に付き１２室、Ｊ棟は１０階建て。
２０３０年度入学生の割り当ては、４～５階。
真由美が４階、真澄の部屋はここ、５階だった。

「……マジかよ……」

東側の端から2室目。
ちなみに両端は使われていない。
隼斗が示したのは3室目。

「こっち、俺の部屋……」

微妙な声に、匡征がくつくつと笑い、真由美がぽかんとし。
セキュリティ認証中の真澄がドアに額をぶつけた。

「…何、オレ早々に死亡フラグ立ったワケ？」

扉を開いて客を招き入れつつ、真澄が言う。

「まだフラグだけだろう、自称クラッシャー」
面白そうな匡征に、そうだよな、と呟いた。

もちろん。
櫻樹の最新セキュリティに異常は無かった。
「っじゃあ何なんだよコレ！」
リビングのテーブルの真ん中に、爽やかな水色の紙袋が1つ。
「異常無しってなってるよ？　こんなの瞬間移動でもしないと無理じゃない」
一応、存在はする移動法。
しかし、セキュリティはそれにも対応しているはずだ。
最新セキュリティを出し抜く程の、精密もしくは強大な能力の持ち主が、ここに来る理由は？
説明書片手の真由美に、2人が反応した。
（（猫系列ッ））
心当たり、無きにしも非ず。
振り返れば、胡散臭い程に爽やかな、水色。

「セキュリティが甘いのか？」

疑う真澄に、

「そんなはず無いよ！　Ｐｕｓｓｙ（プシ）　Ｃａｔ（キャット）製だもん」

主婦・真由美。

リアルにそんなの関係ねー、と顔を見合わせる男２人。

「関係ねーってどういうことだよッ」

「…現在全事解説書（ＨＡＬ事典）貸してみな」

Ａ６サイズの極薄辞書に、チューナーを繋いで起動、数個のパスワードを入力し調整しつつ、「青猫」の画像を検索。

「…こいつに見覚えは？」

「……レイディ…」

「女の子」

隼斗が指した画面を見る真澄と、覗き込む真由美。

「女の子、ねえ」

少々刺々しい匡征の声。

画面の中には、明るく微笑む長い黒髪の女性。

「解像度悪いな。髪も目も黒に見える」

「コイツ、何歳に見える？」

お前アレルギーじゃなかったのか？　と言いながらも不満げな隼斗。
思いっきり不満な顔で問う匡征。
「えー、２０代ではあるよね？　２５・６かな。…あ、若く見えるけど実は３０前！　とか？」
「に、じゅぅ……」
「どうやって出したんだ。普通にやってもこんな画面でないぞ！？」
「製作者が親切なんだ。こちらがハッキングしたという設定で機密情報をくれる。公式裏トップからチューナーを繋いで第２に入らずに第４に跳ぶ。多分これが今の最新だ」
無邪気な真由美に愕然とした匡征。
不審げな真澄にさらっと言った隼斗。
「とりあえず、開けても死なないんだな」
紅茶とコーヒーの瓶、６つの小袋。
未開封なのにやけに軽いクッキーの缶を振りつつ、真澄は封筒を開ける。
［エディへ
おめでとう！　入学祝です。小さな袋は『４人の友人』と『友達１人』に渡してください。
それではＢｏｎｎｅ　Ｃｈａｎｃｅ！　Ｊａｎｅ　Ｇ．」
「…相変わらず達筆でございますな……」
「そして英語で無いのもまた然り。最後仏語だし」
勉強になるけど何で羅語（ラテン）？　と言いつつ中身を透かした真澄は結

論を出す。
「嫌がらせだな。ほれ」
中身は本＋α。
「クソ猫があぁぁぁぁッ」
「…まあ、まだ良心的か…？」
「ぉぉぉぉぉぉぉ！！」
『これでわかる！　猫ちゃんの気持ち？』『艦船技術入門』『如何に安く豪華に魅せるか～マル秘レシピ大公開！～』そして、
「『魅惑のエレキ・ヴァイオリン』『不勉強のススメ』『紅い夜明け』……これは？」
「尾上竜貴、愛洲拓夢。レイディの知ってそうな奴となると」
順にそういう結果になったようだ。
「じゃあこれは？　最後の。これだけ小説……ってコレ！　樫修馬の新刊じゃ…発売来月じゃなかったの！？」
「オレのだ。６つ目だからな」
緑閃光に紅い夜明け、ということらしい。
「スミ！　今から貸してよ！！」
「それはいいが、……メシは？」
「作ってて！」
真由美はその作者のファンであるらしい。

しかし、ついこの間その名を聞いたことは忘れてしまっているようだ。

［追伸
お使い頼んだんだけど、大丈夫だった？　クッキー減ってない？
あの子私に似ちゃったからね……］

viii（後書き）

昼食を自ら放棄した（？）真由美サン。
ちゃんとおいしくいただけました、ということで、これで終わりです、昼食編↑

ありがとうございました。

ix（前書き）

意味が解りません、隊長！！

……そういえば、土沙悠利のアダ名も、隊長だった……

ix

「スミってさー」
「んー？」

６月のとある月曜。
一番テストから離れた雨の合間。

「なんかすごく漢前（おとこ）だよねー」
「…それは褒め言葉ととればいいんだな？」

２００人中１８位に滑り込んだご機嫌の真由美に対して、１２位で少々ショックな真澄。
ちなみに１位は余裕の拓夢、３０点差でほぼ横並びの２〜４位は隼斗、匡征、酒井楓（さかいかえで）。

「多分ねー。…尾上くん、大丈夫ー？」
「オノウエゆーな……親父呼ばれてるみたいだから」

キレイさっぱり音楽に切り替えている彼は、Ｊの下から２位。
学年ではそれでも２４位だった。

「えー、じゃあ『リュウ』くん？」
「『キ』まで言えっ！　『竜』まで親父と同じなんだ！！」

歌える…歌える…俺は演歌やラップじゃなくても歌える…俺は歌える…っ！　と、竜貴はうわ言のようにつぶやいている。

「あ、雨！　わお、傘破れてたんだったっ、買ってくるね！」

「…金あるか？」
「大丈夫！！」
駆け出す真由美を見送った真澄は、呻く竜貴を背中に電子書籍（ほん）を読み始める。
それもつかの間、
「…目崎くん」
机に放り上げた脚の横に、ドレス。
（あー、3度目（サードコンタクト）は向こう側から、か）
「何、御浜さん」
「……脚、下ろしません？」
真澄は立ち上がり、机に座りなおした。
「…匡征に灸でも据えられた？」
美園はいささかむっとしたような顔をしたが、気を取り直して言った。
「なぜ、貴方がたは、あのように言ったのですか」
一瞬キョトンとした真澄は、ああ、と話をすり替えた。
「物事のすべてには、理由がある」
一体何を話すのかと、今度は美園が当惑する番だった。

「そして、物事のすべてには、例外がある。誰だかが言っていたが、そーゆーこと」

静かに言う真澄を、現実世界に戻ってきたらしい竜貴が後からつついた。

「…何だよ」
「……1億2千31」
「……自分じゃなくて身の回りを見ろってさ」

美園に見られた竜貴は狸寝入りを決め込んだ。
廊下から、バタバタと櫻樹にあるまじき足音が近づいてくる。

「ま、みなそれぞれ少しずつ、何かあるんだろさ」

ぽんと美園の頭に手を置いて、真澄は机からファイルを引っ張り出した。

「じゃあな竜貴。見捨てていくぜ？」
「…おいこの薄情者――ッ！！」
「スミー！　図書館行こーっ」
「はいはいすぐ行く」

教室を出て行く真澄。
反対の扉から入れ違い、窓際へと歩く、影。

「うっわー、陵くん再来？」

暦が呟き、

「や、フォルでしょ。女の子タラしてんだから。フォルカー・エヴァルト」

水色と見紛う独特な銀の長髪が、窓際越しに抱き付き、笑う。

そして、

「っう、ぁ……」

「……あー、悪ぃ。……拓夢？」

可哀想な噂の息子が校門前で暴走（ノーヘル）バイクに轢かれそうになり、

「暦？　…と、遮夢の誤魔化し屋、か……」

故人を惜しむ刺青の男が、懐かしい響きに声を漏らした。

ix（後書き）

○登場人物○

『御浜美園（みはま みその）』　ドレスの女性。日本人ではない。

Ｊに入りたくて１浪した、ある意味カッコいい人。身長は１５８位。

x（前書き）

書いていてウザくなった。
鉛筆で頑張ってる方はえっくすえっくすえっくすえっくすぶいあいあい。
……何話ですかっ

x

「中庭ー！！」
「…オマエ期末は大丈夫なのか？」
来週、期末なのだ。
……一応。
「はっ！　私の心は既に3校分科会さっ！！」
櫻樹と、日本語で言うところの嫣戍（えんじゅ）、庵就（あんじゅ）の3校分科会が夏休み、開催される。
「…オマエさ、まともに通用語話せたっけ？」
「ばっちり片言！」
「……どうかと思うぞ。第一何のために行くんだ…」
嫣戍はヨーロッパ・ドイツに、庵就はカナダはケベックにある。
……地球地理的に言うと。
「言っとくが、英語が通じるとは思うなよ？」
「わかってるよ、わかってはいるんだけど…っわ！」
真澄は一応、話せないというのは真由美の冗談だと思っている。
言っていると、数人の女生徒の群に突入されてしまっていた。
「済まないね、大丈夫かい？　中井君、今のはどう見たって貴女の不注意だ。きちんと謝罪したまえ」
「やあっだぁ先生ったらぁっ！　みゆは悪くないんだもーん！」

「……スミ、殺したい……」
「9割方同意……」

「ま」で始まって「み」で終わる名を持つ2人の意見は一致した。

「いえ、こちらこs
「そおっよぉっ！！　みゆが悪いはずないもーん！　みゆとお兄ちゃまが一番偉いんだもーん！　みゆは女の子だからもっと偉いんだもーん！！」

「「……」」

2人は、実行に移せない自分達を呪った。

「それは違うと思うがね。…貴方達も早く戻りたまえ」

やぁーん先生ーぇと騒ぐ「みゆ」をどう説得したのか、女の子たちは一応去っていった。
後に残ったのは、

「えっと…、先生、ですよね」
「……I、Jだけだと承諾したのに、何故あのような輩と関らなければならないのだろうね。不思議で仕方が無い」

黄味の入った濃く長い赤毛を持つ外国人、だった。

「あ、IJだったら私達も入るんでしょうか。1Jなんですけど…」
「ああ、期末考査が終わり次第始めよう。私はネイ・ナーガス」

３０代と見えるその教師は、ゆるりと笑うと右手を差し出した。
「え、えっと…片岡真由美です。よろしくお願いします。…えっとこっちが」
「同じく１Ｊの、目崎真澄」
「緑閃光（グリーンフラッシュ）か。面白いね。妹は知っているのかな？」
妹？　と呟く真澄を無視して、ネイは真由美の肩に両手を置いた。
「オーロラに関せず頑張るのは良いことだ。オーロラだけではない。外界――闇の中でも使える人間になりたまえ。学問として学べるのはこの数年だけなのだから」
驚く真由美の頭をぽんぽんと撫でて、力は私の方が上なのに立場上アレを殺せない我が身を呪うよ、と呟く。
同士ができた。真由美はそう思った。
「世美（よみ）、美寄（みき）、潮華（しおか）とジョセフィーヌに始まって、じん、ジェア、ジェインの登用。霧のあれは実力でされた事なのだが、何を勘違いしたか女子至上主義にまで発展している。住みづらい世の中になってきたね、エドワード……いや、目崎真澄。しかしまあ、もう少しすれば実力主義に戻るだろうが」
二人共大変だろうが頑張りたまえ、という声を残して、ネイは去っていく。
「…スミ……」
「……どうした」
真澄は、真由美の声にビミョウなものを聞き取った。

「…ちょーびけー…」
「……オマエな…」

真由美には他意はない。

「あ、科目聞くの忘れてた」
「……」
「スミ？」

呆れ顔の真澄はなんでもない、と言う。
だが、

「それにしても、どっかで見たような…」

その、少し後。
「なんだ、もう知っているんじゃないか」
「イズ――稜実（いずみ）の方が来ていたよ。お使いだって言って、クッキーかじりながら」
「それが土産だったりするんだろう。外見は聖夜なのに、中身は完全にリルだね」
「さ、朔（さく）…いい加減離して」
「嫌（ヤ）だ。こゆは俺のこと嫌い？」
「違う！　けど」

「朔夜（さくや）、あまりしつこいと嫌われると思うがね。暦？　行こうか」
「…うん」
「って、ネイ！　ネイ・ディロウ！！　こゆ連れて行くな！」
「ネイ・ディロウって誰だい。来るんじゃないよ？　貴方がたの悪口言うんだから」
「こーゆー時だけ戻るな！！」
「ここでは女なんだがね。それじゃあ……『暦は貰って行くよ』？」
「わお、ネイかっこいー！！」
「……なんなんだその悪役っぷりは……」

雨の気配。
寝苦しい夜になりそうだ。

x（後書き）

……あれ？　と思った人。
その中で、鉛筆で書かれたものを思い出した人。
……キミは、知人だ。

○登場人物○
『ネイ・ナーガス』去年から櫻樹非常勤講師。
長い赤毛の美人で長身、１７８ｃｍ。

xi（前書き）

竜貴って金髪メッシュ（地は黒髪）です。
知ってましたか↑

xi

「いえーい１６位！！　スミは？」
「……１０」
「おめでとーっ！！　って、見ればわかるか」

貼り出された順位表の前。
一の下の、一番大きな名前は勿論というか何というか「愛洲拓夢」だ。

「やったぜ片岡――っ！！」
「うぎゃぁ！」

いきなり背後に出現した重量に、真由美が（？）悲鳴を上げた。
小柄だとはいえ人間、重い。

「１７位！　ケツ２からの脱出！　逆境を乗り越えての栄光！　そして感動！！」
「お、おめでと、りゅーきくん……作詞家になれそうだね」

背中の竜貴（オモリ）が外れて、そちらを向いた真由美は少しの違和感に気付く。

「…今日、金髪率高くない？」
「……あは☆」

どうやら錯覚ではなかったようである。

「……そうだ、りゅーきくんは分科会何に行くの？」

「オーロラの現在情勢のなんちゃらってあったろ？　それと、法律のやつ空き時間に見学だけさせてもらおうと思ってる。片岡は？」
「特殊現象すらっしゅ能力、だよ。…りゅーきくんが法律ってなんか意外…」
「意外って……俺裁かれる側だと思われてる？」
「あははー」
「…マジかよ」

沈黙は肯定、笑いは確定だ。

「目崎」

ディフェンディングチャンピオンの声を聞きつけた2人が、そろって壁に張り付いた。
いわゆる「ストーカーのポーズ」だ。

「今回、出るらしい」

職員棟へと繋がる廊下に、拓夢と真澄の声が響いた。

「…まさか庵就の」

（ターゲットを確認したであります隊長！）
（総員、写メの用意をすべし！）
（ラジャー！！）

真由美と竜貴は根本的なノリが合うらしい。
ちなみに、この2人に真澄、拓夢の声はほとんど聞こえていない。

「「アルバート」？」

（ハモりました隊長！！！）
（待機！　まだだっ隊員！！）

Ｊの２人が意味不明なことをしている…！
不審者として有名になりそうな奴らをよそに、もう２人の話は進む。

「何やってんだよッ、世界征服か！？」
「…無いだろ、いくらなんでも。現象・能力に出るついでらしい…」

悪い方向に。

「ウソだろ！？」

（（何がッ！？））

心中で叫ぶ２人の背に、長い影がかかる。

「……お前ら一体何してんだ」
「へ？　…ぅわっ」
「はあ？　…ぎょえええええええええ」
「…どこの恐竜だお前は」

２人が気付いた時には、真由美は肩に担がれ、竜貴は襟首を掴まれ引きずられていた。

「…覗き虫２匹捕まえたが……どうする」
「竜貴だ――――！　恐竜じゃねえええええ」
「同じだろ」
「それは少し酷くないか？」

ドサリと竜貴を足元に投げ出したのは、Ｊを変人と見なし始めた、他クラスの視線に耐えかねた匡征だった。

「アルバートが出てくるというのは本当か？」
「らしいな。…お前はどこだ」
「嫣戍だ、残念ながら。張るには遠い」

知ってるのか、と呟いた真澄は、あ、と声を漏らして自分の前方を指した。

「どうだろう」
「…無理だろ」

指された先には、肩が刺さっていた腹を押える、真由美だった。

xi（後書き）

一応こいつら（主に小さい2人）、賢いやつらなんです。

xii

「ろーしやろーしやろぉぉしあ♪」

期末が終わって、なぜか新教科が出て来はじめた。

選択語学は6単位3教科。

3つ目でロシア語を取ってきた真由美が、第三講堂ではしゃいでいた。

「スミは何でギリシャ語なの？」

「…ロシア語は一応片言程度に話せるから」

「ふんっ、嫌味な奴！」

「…オマエが聞いたんだろ」

きーんこーん、と本鈴が鳴る。

が、

「先生来ないね…」

「その前に一体何の授業なんだこれは」

櫻樹にしては狭い第三講堂に、１Ｊの２０人が集められていた。

「ス～ミ～」

「…何だよ」

「ヒ　マ　だ　よ　ッ」

「……知るかっ」

その声に、被るか、被らないか。

消音器は確実。
鈍い、銃の音。
感じられない程度の僅かな違和感は無視する。
ひゅっと息をつめて、真澄が真由美を後ろに回した。
音の出所は、窓。
ざわざわとしていた講堂が、一瞬にしてピリピリとした緊張感に覆われる。

その中。
隼斗が懐から手を出して、
匡征がため息をついて、
拓夢がめんどくさそうに、
「何だよもう」と呟いて竜貴が、座り込んだ。

未だ痛いほどの殺気とでも言うべきものが、それ以外の空間を満たしていた。

不意に、
ぱちぱちぱち、と気の無い拍手が響いた。
睨む方とは逆の、入り口の、扉から。

「お見事、と言わせてもらおう。特にそこの４人。及第点だ。日本の学校としてはなかなか有望なクラスじゃないか、暦」
「平和ボケ日本（ニッポン）としてはね、私もだけど。……遅いよ、橋本くん。

私の知り合いとかはみんな、引金引こうとした瞬間に、既に息の根止めてますって人が多いんだけど」
「貴女の家族やその周囲は世界最高水準と見て差し支えないと思うがね。…まあ1人2人、…3人かな？　残念に思う者はいるが」

長い赤毛を靡かせて、一方を睨む。

「何故（なにゆえ）に己はJクラスなのか。何故にこの櫻樹にこのJクラスが存在するのか。それを真剣に考えた事はあるかな？　同じ特進。されど、IとJには明確な壁が存在する。それは何なのか」

厳しい目で周囲を見渡してから、ネイは物質的に思われる視線をふっと緩めた。

「本年度中に見つけられる事を、願おう。座りたまえ。ああ、貴女、次回からはきちんと予告されるはずだ。もう少し動きやすい服装で来たまえ。今回は暦のドッキリだ」
「私のせい？　ネイだって…」

言い出す暦を目で制し（傍目には綺麗な流し目だ）、ネイは言葉を続けた。

「私はネイ・ナーガス。1年次には自衛を教授する事になる。望むなら以降、体術でも兵法でも教えよう。櫻樹Jには必須、かつ危険を伴う科目だ。安易な気持ちで臨むのはやめていただきたい。私は実技は容赦しない主義だ。戦場には男も女もないのでな。……それでは」

ネイは胡坐をかいて座ると、暦に傍らの椅子を勧めた。

「出席番号順に名前と、後何かあれば。４限はカットだったな。２時間半ある。遊ぶなり勉強するなり好きにすればいいだろう。これからは、忙しくなるのだから」
「ネイ、甘やかしすぎじゃない？」
言った暦に、ネイは穏やかなのに凄絶に見える笑みで応えた。
「良いだろう？　このくらいの猶予は。……先刻も言ったが、授業内容に関し妥協は一切しない」
マジかよ、と思わず呟く隼斗の声に、絶望に近い響きがあった。

xii（後書き）

この人大好きだけど難しい……

xiii（前書き）

真由美ちゃん休憩中。
今回出てるのは誰でしょう??

xiii

「ネイが櫻樹で暴れてるんだって。こゆちゃんも一緒にさっくん虐めてるらしいよ」
「ということは、朔夜さん、櫻樹にまで出没するようになったんですか」
「らしいね。この前もイズがクッキーつままれたって怒ってたし」
「…それは緑閃光への土産じゃありませんでした？」

暖かい女声と、ほわりとした男声。

「うん、エディの。…しゅうくんは会えなかったんだよね」
「ええ、半年もあったのに。あの時期は忙しかったので」
「ごめんね、私使えるものは全部使う主義なんだ」
「知ってますよ。ご自分も駒の一つとして使っているでしょう。だから、許します」

女声の主が、男声の主に抱きついた。

「うー、有り難いよー本当に！　私に何かできることはある？」
「大学に行く時間を貰っているだけで十分です」
「あーもー、しゅうくん大好きだよー」
「…なら放してください。聖夜さんはともかく、凶眼に睨まれたら即死なんですから」

冗談じゃありません、僕を大学に行かせない気ですか！　という男に、女が問う。

「でも大学は自力で行きなよ？　今どうなってるの？」

「勉強の方は、まだ首席から落ちていませんよ。…アレは別ですが」
「キミねぇ…、勉強以前にどうにかする必要あると思うんだけど」

仕込むか、という女に、男はそんな無茶な、と返した。

「じゃあ早いとこ良いお嫁さん見つけなさい！　ジムみたいな」
「…や、男でしょ。家事も育児も最強なんでしょうけどっ。それに４０も年上ですよ、あの人」
「ならば修行だ！　戦場には男も女もないのでな！！」
「……中将の受け売りですか」
「世界の全ては受け売りによって成り立っている！　…と、ジエラも言っている」

ジエラ――獅詠螺の読みとして現在当てられている――は、オーロラ王族初期の「詠い手」だ。

「全てというのは大袈裟だと思うんですが」
「え、信じた！？　真実前提で話してる！？　ごめん、ジエラじゃないよ……」
「知ってますよ。僕を誰だと思ってるんです」
「しゅうくん」
「…朝輝さんのそういうところは好きですよ」

他愛も無いと思える会話。
その裏で、表でも、何かを大きく動かしていた。

「そういえば、面白い子を見つけたんですよ」
「ロックオン？」
「いえ、素直に友達になれればと思ってるんです」

たとえば、そう。
［Ｂｏｎｎｅ　Ｃｈａｎｃｅ］。
「まあ、がんばってね？」
「ありがとうございます、Ｌｅｄｙ　Ｌｕｃｋ」
『朝輝！！』
がしっ、と。
空色よりは薄い青みの銀髪……というより、水色の長髪が朝輝に抱きついた。
『朝輝、愛してる』
「い、イズ！？」
「…そろそろお暇させて頂きますね。ああ、軍部にはちゃんと顔出していきます」
「うん、改心してくれて嬉しいよ。…ってイズ！　ちょっと何やって…」
『愛してる』
「そーじゃなくって！！　まさかオーティス放って来たの！？　あの子怒ると怖いよ！？」
じたばたと暴れる２人を尻目に、彼は静かに部屋を辞した。
結局、軍部に顔を出して行くことになった。
やはり、彼女には敵わないようだ。
（１００年早い！　って感じだなぁ…。でもま、彼女の所に行く時点でもう決まっていたんだろうけど。説得された、っていう、納得できる事実が欲しかったんだろうな）

さて、作文でもするか、と彼は呟き、伸びをした。

（普段はそんなの即興でやってるけど、今回はあの子も居るし。特研によって……ついでに文部で資料貰おうかな。……そういえば、あの子）

彼はゆるりと思考をめぐらす。

「緑閃光の、知人だったかな？」

最後の一言は、声に出ていた。

xiii（後書き）

次回はお馴染みの奴らが出てきます。
そして珍しく授業風景です。

xiv（前書き）

珍しく（初か？）授業風景。

「学園物」のタグはどーせかざりですよッ（泣

xiv

「お、おろ、…おどお……、ぉおどおきもおーきさんしょーきッ」
「驚き桃の木山椒の木、だろ？　何が物置参照記だ」
「え、私には酸素沖って聞こえたけど」
「で、何が驚きなんだ」
「中嶋が無断欠席。つーか寮に帰ってねーだろ？　無断外泊！」

きィィィん。
本日チャイムはフィードバックしている、とは竜貴の言。

「珍しいよな、ＩＪの無断って」
「有断かもしれないよ？」
「今の本鈴ですー！　席に戻る！　教科書出して！！」
「あ、暦ちゃん来た。じゃーねー」
「ま、真澄、お前予習してるか！？」

今日俺から当たる、絶対！　と、比較的一般人に近い感覚を持つ竜貴が、恐る恐る後を向いた。
しかしもちろん、

「……まさか」
「…だよな。日常会話はどーにでもなるけど、書くとなると……」

真澄が仏語の予習など、している訳が無い。

「尾上くん前向いて。４９ページからなんだけど」
「い、いるふぇぼーねすぽ…？」

竜貴は適当な日常会話で誤魔化す作戦に出た。

「・・・Ｃｏｍｍｅ　ｉｌ　ｆａｉｔ　ｌｏｕｒｄ，　ａｕｊｏｕｒｄ'　ｈｕｉ・・・？」

「……け？　けるたんぺらちゅーるふぇてイるッ！！」

訳すと、こうだ。

『い、いいお天気ですね…？』

『…今日は蒸し暑くない？』

『……き、気温はどれくらいなんでしょーかッ！！』

竜貴の必死の作戦。

しかし、暦は強かった。

「はい、じゃあ今のを前に書きに来て？」

「無理ッス！　ゴメンナサイ！！　予習してませんッ！」

「よし、唐風部屋に移動！　文法みっちり仕込まれてきなさい」

「ごめんなさい！！　次から絶対にキッチリやってきます！」

「唐風部屋」というのは、高等部生にとっての地獄である。

唐風という寒がりの語学教師が文法・ライティングを教えるのだが、スパルタで有名。

本人の体型と合わせて、唐風部屋と呼ばれている。

櫻樹にはユニークな者が多い。

「ん、よろしい。絶対よ？　…じゃあ教科書４９ページね。目崎くん訳して」

もちろんその内の１人であるため暦も、なかなか「普通」とは形容しがたい。

「日本は４つの大きな島と、たくさんの小さな島とで構成されている」
「うん、完璧。隣、四角の文章例を酒井さん」
まあ櫻樹生、特にＪクラスに「普通」という概念を求めるのもどうかと思う。
「はい、Ｌｅ ｍｏｎｔ Ｆｕｊｉ ｅｓｔ ｌｅ ｐｌｕｓ ｈａｕｔ ｓｏｍｍｅｔ ｄｕ Ｊａｐｏｎ.」
「Ｌｅ Ｊａｐｏｎ ｓｅ ｃｏｍｐｏｓｅ ｄｅ ｑｕａｔｒｅ ｇｒａｎｄｅｓ ｉｌｅｓ ｅｔ ｄ'ｕｎｅ ｍｕｌｔｉｔｕｄｅ ｄｅ ｐｅｔｉｔｅｓ ｉｌｅｓ.」
そして、
「富士山は日本一高い山である。」
さすが櫻樹の五指に入るともなると、的確な訳をする。
と、竜貴は思っている。
だが彼らの違いは予習の有無、ただそれだけだ。
「Ｇｒｅａｔ！ 次のページ、読んで訳して……」
「遅れてすみません」
ガラリと扉が開いて、隼斗が入ってきた。
「あら、思ったより早く開放して貰えたようね。座って？」
「暦、ミストレスからの伝言だ。リチャードを返す代わりに、愚弟を持って行く。２、３日帰らないと思うが、犬死する前に私が殺し

ておくから心配は無用、とのことだ。済まないね、これからもあると思うが」

閉めなかったドアから、ネイが顔を覗かせた。

「あの人は大丈夫でしょ。中嶋くんもＧＨＪだから公欠で届けられるし。…それにしても多いわね、徴兵令…」

「これぱかりは本人の意思でどうにもならないからね……。ああ、私はそろそろ」

「行くの？」

「行かざるをえんだろう。……では、失敬」

引き際も鮮やかに、ネイが去ってゆく。

暦の次の一言で、

「中嶋くん、眠いのなら起きなさい。死にそうなら寮へどうぞ」

クラスはまた授業へと戻った。

ｘｉｖ（後書き）

この後、職場恋愛やらなんやらと騒いだ奴等が居たそうな。
しかし、共に既婚者。
というか、もっと大きな問題があるぞ！？　（●●のタグを付ける気はさらっさら無い。

あ、フランス語は適当です。
おかしかったらご指摘願います。本当に！

ｘｖ（前書き）

投稿したのを全部消しました。
いっそ死にたいくらいのダメージを受けています（だからなんだ

xv

「じ、でゅる、あぅ片岡真由美、ょぅりなスぃ、ぅ……」
「……えと、かたおかまゆみさん？　ってことは、日本人だよね」
「はい！　日本人です！！」

真由美は、目の前で笑う（自称）日系人に抱き付きたい衝動を覚えた。

「スミ！　どうしよう！！」
「…なんだよ」
「私、通用語話せないよ！？」

がくっ、と効果音をつけて、数人の頭が落ちた。

「…オマエさ、何で櫻樹に来たわけ？」

通用語（シルカギニラ）と叙述語（ドレスタンテ）、表陣語（ネティリカスク）は、櫻樹の一部はじめ「裏世界」と呼ばれるところではほぼ必須である。
のだが、

「通三語使えない、とか言うなよ？」

「…表陣語はビミョウにできる……」
「……それじゃオマエ、論文読めねーだろ！？」
マジかよ、と真澄は頭を抱えた。
「Ｊから他に現能行く奴居ねーのに！　どーすんだよっ」
「こっ、高校入ってから勉強はしてたよ！？　でも間に合わなくて」
こういう「世界」ではまず結果が第一だ。
「なら何で一般科申し込まなかったんだ…」
「だって現象……」
真由美は自分のとある理由から、「特殊な」現象に固執する。
真澄は溜息をついた。
「教師か、有力な特進生に許可取って、録音させてもらえ。今回発言は諦めろ。一日分ずつ訳してやるから」
「スミ！　あんた神だ！！」
がしぃっ、と抱きついた真由美は、不穏な空気を感じて顔を上げた。
「マユ。……勉強しろッ」
「はいぃぃ！！！」
一応、三日前にこのようなやり取りがあったことは、１Ｊでは周知の事実となっている。

で、その三日後。
つまり今日、分科会当日。

ヨーロッパ、ドイツは嫣戍校高等部門前にて。

真由美がこけかけ、

『おっと、大丈夫？』
『はい、大丈夫、です。ありがとぅ、ございます』
『緑、だったら、櫻樹生？　１年生かな？』
『はい、片岡真由美と、申します。よろしぅお願い、致します……』

冒頭の会話へと、戻る。

ｘｖ（後書き）

神を多用してはいけません。
神に失礼です。

それにしても話進まないな……
でもとりあえず分科会編、ってことで。
あ、『』内は日本語じゃありません。

xvi（前書き）

出たっ

あのお方が出たっ！

xvi

「そりゃ大変。わからなかったら聞いてね、通用語はほとんどネイティヴだから」

二回目だから道案内もするよ、と微笑んだのは、庵就高二年の三宅修治（やけしゅうじ）だ。

「ありがとうございます！　三宅（みや）さんは何科なんですか？」

「んー、現象能力だけど？」

「あ、私もです！　分科会ってどんな感じなんですか？」

「…そうだなあ、現能は割りと硬派な感じ？　人数は少なめだけど、少数精鋭って漢字で。発言権はきっちり取っとかないとね」

人間、見かけと中身が必ずしも一致するとは限らない。蜂蜜色の目を細めて、修治は真由美を見やった。

「は、発言権ですか」

「そう。言いたい事あるなら最初に言っとかないと先にとられちゃうし、後からだと他の意見も含めないといけないでしょ」

なんか面倒だし、といかにものほほんとして言う修治を見て、真由美はなぜか自分が焦りだすのを感じていた。

（この人って、もしかしてもしかすると凄い人なんじゃ……）

漠然としかない、しかし湧き上がる不安を押しのけるように、真由美は尋ねる。

「あの、分科会って録音してもいいんでしょうか」
「いいんじゃない？　あ、機械（レコーダー）は見えるように出しといてね。もし何か言われるようなら僕が許可したって言えばいいし。実際僕は知人にライヴしてるしね」

一応明文化はされてないよ？　と修治は笑った。
校内は電波が規制されライン化されており、普通に考えると中継（ライヴ）は不可能。
恐ろしいので真由美は聞く事ができない。

「あ、ここ図書館ね。一週間居るんだから何度か使うでしょ」
「わ、広い！　明るいですね！！」
「…だろうね。一回櫻樹に行った事はあるけど、「書庫」でしょ、あそこ」

実際、櫻樹高は図書館だけが櫻樹に非ずと言われている。
蔵書数は多いものの、暗く狭く、本が詰め込まれている。
はっきり言うなれば、ボロい。

「あの、一度行ってみてもいいですか？」
「ん、どうぞ。僕は何か飲み物でも買ってくるね。カード作っといたら？」
「はい！　ありがとうございます！！」

笑って手を振る修治を見送って、真由美は図書館へと足を踏み入れた。

（明るい！　これぞ図書館っ）

『あ、あのっ、カードを、作りたい、ですけど……』

……カウンターに座っていた、２０代中頃と見える長い黒髪の女性に声をかけた。
他に人はいない。

「んー、日本人に見えるけど。文学か神話か現能の分科会？　櫻樹の子？」

……カウンターの上で軽く首をかしげる彼女の言葉に、真由美は飛びついた。

「はい！　櫻樹高１Ｊの片岡真由美です！」
「あ、キミが噂の。私はそーだねー…、リルってことで。よろしくねー。…あ、ここに名前」
「よろしくお願いします！　…住所はどう書けば…」
「んー、いらないと思うよ？　［ＯＨ１Ｊ］って住所のところに、あと出席番号があればいでしょ」

勝手にしたけどいいよね、とパソコンに打ち込んで、彼女はカードを差し出した。

「はいどーぞ♪　現象関係の論文はコーナー曲がって右の辺りねー」
「ありがとうございま、す……？」

ふわり、と。
頭を上げた真由美の額に、

「ご挨拶、ということで。雨にも負けず、風にも負けず、姉（ネイ）にもエディにもリチャードにも負けず」

アルバートを味方に持ち、けして諦めず。
彼女の唇が触れていた。
いつも楽しく笑えるように。
そして、

「あは、じゃーね、Ｂｏｎｎｅ　Ｃｈａｎｃｅ！」

驚く真由美を残し、彼女は消えていた。

ｘｖｉ（後書き）

○登場人物○

『三宅（みやけ）　修治（じゅうじ）』　庵就高二年、男性。

焦げ茶色の髪に蜂蜜色の瞳の日系三世。身長は１７５ｃｍ前後。

xvii（前書き）

入力が辛い……っ（涙

xviii

（右の方右の方右の方）

真由美は論文コーナーを彷徨っていた。

（Ｋ、Ｋｉａ　Ｋａｓａｎａｇｉ……あ、この辺？）

そういえば、どうして現象関係が欲しいってわかったんだろう。科学、超二力、そしてオカルトの点から見た『現象』についての論文。

（やっぱり叙述語だ。勉強しないと……）

「おい」

（っ、あ――――――！！　『能力と色彩』、『能力と色彩』あったのに――――――――！！）

論文『能力と色彩――視覚の限界／Ｋｉａ　Ｋａｓａｎａｇｉ』を求めて暴れる真由美を、誰かが奥に引っ張り込んだ。

「なぜここに居るんだ」

どこかで聞いた覚えのある声に顔を上げた真由美は、思わず逃げようとした。

「なぜ居るんだと聞いている！」

茶色っぽい短髪、黒い瞳。
東洋人、朝鮮人系の顔立ちに、見覚えが。

（っ、あの人だあああああ）

逃げは腕を掴まれることによって封じられる。
それでもじりじりと距離を取ろうとする真由美に、彼はため息をついた。

（……あれ？）

「いいか、ここは」
「貴公は己が何をしているのか、理解しているのかね？　ドーラン」

少々違和感はあるが、覚えのある独特な口調が降ってきた。

「え！？」
「…なんだと」

残念ながら、棚の陰から出てきたのは不適に笑う本人、ではなかった。

「ははっ、効果絶大」

クスクス笑いつつ出てきたのは、三宅修治。が、すぐに悪戯な笑いを消した。

「死にたいの、ドーラン。僕の連れに手を出さないで」

真由美の手を引いて、修治はコーナーを出た。

やっぱり広い嫣戍(えんじゅ)の図書館に感動しつつ、真由美は何か懐かしさを感じていた。

「大丈夫だった？　何もされてない？」

「あ、はい、全く大丈夫です。…ところで何で先生の真似したんですか？」

「先生？　――――ああ、中将」

一瞬考えるそぶりを見せて、しかし修治はすぐに言葉を繋いだ。

「ネイ・ディロウって、今櫻樹に呼ばれてるんだってね」

「え、ディロウ？　中将って…」

「旧姓。今はナーガスか。軍部――――礎(いしずえ)では有名な人だよ。蒼(あおのや)の刃(いば)って、朱(あけ)の剣(つるぎ)と並んで」

二人は昔からのライバルながら仲が良いことは周知の事実だ。だが軍部の者はネイの名がナーガスになったことを知る者は一部を除いてほとんど居らず、それ以外の者は朱の剣の名前がレイグ・ナーガスであるということを知らない。

「蒼、…って、飄雅衆(ひょうがしゅう)の！？」

「そう。正確には闇衆の方だけどね。キミもしかして飄雅衆ファン？」

「命です！！」

その割りに鈍いことは指摘しないで放っておくべきだろう。

飄雅衆（闇紫銀衆とも言う）は、２０１０年代後半から囁かれ始めた、銀遊(ぎんゆう)系結社「河川」に対抗できる人間史上初の組織である。厳密には明確に組織であるわけではなく、本人達曰く「群れてるだけ」らしいのだが。

そして、飄雅衆のバックアップにまわるメンバーを、闇衆という。

「そうそうこれ、忘れてたよ？」

「え？　…あ！！」

話を切って修治が差し出したのは、『能力と色彩』。

「ありがとうございます！」

「よく借りられたね～。普段行っても無いよ、その本。あ、そういえば飄雅衆レギュラーに『ばけばけ』って名乗ってるの居るでしょ」

闇衆（助力者）でも銀砂衆（助参者）でもなく、飄雅衆（本人）。

「あれって笠凪岐亜（かさなぎ きあ）の事らしいよ？」

笠凪岐亜――カサナギ・キア――Ｋｉａ　Ｋａｓａｎａｇｉ――。

真由美の中で、何かがスパークしたようだ。

「ほ、ほんとですかそれ――――！！」

ほんとだって、と隣で修治がやわらかく笑っていた。

ｘｖｉｉ（後書き）

○単語帳○

『飄雅衆』　レギュラーメンバーは以下。

イヴ、青猫、ＭＯＯＮ、闇の魔王、闇猫、邪神（仮）、二世、シャドウ、ばけばけ、大道芸人。

助力者としては以下が有名。

「青闇衆」エルジェ、チェシャ猫、帽子屋、凶眼、ごまかし屋、昂慧、俳優、朱の剣。

「赤闇衆」女主人、女史、蒼の刃、レディ・ガード、烽火。

銀砂衆（助参者）としては以下。

シウ、Ｆｅｗ、紋章画家、死零魔術師、ディゾ、ＨＡＬ、議長。

Ｂｌｕｅ　Ｃｈｉｌｄと呼ばれる人たち（主にジュニアが多い）が、次期飄雅衆として期待されています。

xviii（前書き）

暦ちゃんが出てこない。
あわれな竜貴も出てこない。

xviii

『でねでねっ、能力破棄の方向で進めるべきだとか言い出すんだよ！？　信じられない！』
「あーそー。結局翻訳はしなくていいんだな？」
『うん、ありがとね。そーだ！　クレープ買って貰ったんだけど、すっごく美味しかったよ！　Ｄｉｒｅｋｔｏｒってお店で、スミも半年居たんなら知ってる？　先輩がねー』
「あーはいはい、時差考えてくれ……頭に響くんだ、そのテンション」
『ご、ごめん……じゃあ切るね！』
「おー、まあがんばれよ？」
『うん、ありがとう！！』

プツンと。
電話が切られた。

「エディ、俺この声好きだな」
「……物好きな。ものっ凄く世話焼けんだぜ？」
「いーじゃん。かわいい」
「……オマエ飲んでんのか！？」

カナダはケベック、庵就学園へと通じる洞を有する協会。
そこから徒歩二分のホテルにて。

「いーじゃん女の子。可愛くないワケ？」
「…抱きつくなキモい。…に、オレの正体知っててそれをオレに言うのか？」
「あぁぁー抱きたい抱きたい凄く抱きたい俺今女の子欠乏症ー…」

「……っだからオレに抱き付くな！　欲しいんならその辺で調達してきやがれッ！」

「エディ」
「……あんだよ」
「……する？」
「死に腐りやがれこのクズがッ！！」

「…煩い黙れ死にたいのかこのクズ共が」

他人の部屋で騒ぐ奴ら2名。

「…なぜよりによって貴様らを匿わねばならんのだ」
「先輩そりゃ自分のせいだ。レイディの頼み断れないくせに」
「辛気臭い顔しなさんな先輩。…ってか水！　髪くらい拭けよっ」

金髪のセミロングから水を滴らせる先輩、もといサデュは、溜息をついた。

「オーティス」
「…はい？」
「何を飲んだ」
「……白ぶどう？」
「を、踏み潰して腐らせた挙句長年放置した奴、だろ！！」

エディ、エドワード――真澄が叫んだ。

「煩い。目立ちたいのなら外に行け」
「んな殺生な」
「使い方違うし」

「しかし、貴様なぜ河川派に手を出した」
「え？　気分？」
「…オレは柄璃（カイリ）を手伝っただけだ」
サデュは再び溜息をついて断罪した。
「同罪」
「事後従犯が何言ってんスか」
河川派に手を出しておいてこの気楽さは何だ、と言いたくなる程、彼らに危機感は無い。
「先輩、レイディはどう動くって言ってた？」
「…それが目的か」
「何が？」
「飄雅（ひょうが）を動かそうとしたんだろう」
柄璃と真澄は一瞬顔を見合わせ、そして
「まあ、そういうことだけど」
嘲笑（わら）った。
自分達の、無力さを。
「動くワケないよね。…動いてくれてもレイディ１人だ」
「あと先輩と」
「そういや先輩と」
はああ、と今度は柄璃が溜息をついて、ベッドに倒れこんだ。

「所詮、俺達はタダの駒。レディ・ラックにはお見通しなんだろ」

女主人（レディ）は、支配者（レディ）。

彼らはレイディが、運命の女神（レディ・ラック）のように思えてならない。

xviii（後書き）

次回は真由美サイドです。
アイツらの子（知らなくて当然）が出てくる模様。

xix（前書き）

希少な赤毛をもう1匹。

xix

『修治、何やってんの』
『何って、デート？』
『お前、まさかのロリ！？』
『あは、そんなに死にたかったのか。……知らなかったよ』

（最後！　最後の声絶対マジだったっ！！）

約四日、修治に通用語を仕込まれた真由美は、日常会話を聞き取る分には不自由しなくなっていた。
砕けた会話もかなりわかる。

（なんか物凄い教えるの上手いんですけどこの人！）

本人曰く、「庵就だって言ったら引く手数多だったよ。家教って儲かるって知ってた？」らしい。
ニュアンスという、参考書だけでは充分でないものを知れるのが、教えてもらえる利点だ。

『ロリって……私のことですか！？』

通用語は規則性を憶えてしまえば日本語に非常に似ている。
こんな単語を聞き取れるのはその規則性と真由美の応用力の賜物だ。

『大丈夫、僕はキミのこと、ちゃんと女の子として見てるから……』
「え！？　あぇ、ちょっと…っ」

理解が追いつかずに真由美は日本語に戻る。

ちょっとゴメンねー、と修治が近づいた。

ストップ、と出した手を取られ、腰を引かれる。
驚いて顔を上げると、金に近い茶色の瞳と目が合う。
ふわりと微笑み、手を掴んでいた手で、そっと瞼を下される。
下した指が、喉から顎へと、滑った。

『悪かったっ、悪かったから修治！　その子離してやってくれ！！』
『何か言う事は？』
『……ゴメンナサイ！　お二人とも！！』

彼は勢いよく思い切り良く頭を下げた。

『はい良くできました』

できればこの状態で話さないでいただきたい。
真由美の願いが届いたのかどうなのか、修治はぽんと頭を叩いて真由美を開放した。

『ありゃりゃ真っ赤。ごめんねー、大丈夫？　…コレは確かサカタニレオンとか言う奴。きみより2つ上かな？』
『コレって何よ…』
『サカタニ……坂谷？』

言われた音に、漢字が嵌った。
しかし、

「え、まさかの日本人！？　上り坂の坂に渓谷の谷、お礼の礼に音楽の音！」
「下り坂でもいいでしょ？　それに渓谷ってどっちもタニじゃない

？」
「…えっと、片岡真由美です……」
真由美の前に居るのは、鮮やかな赤毛。
「あ、これは母親譲りなんだ。親父は生粋の日本人！」
にっこり笑って礼音は手を差し出した。
「よろしくお願いします。坂谷さんはどこの学校なんですか？」
その手を取りながら、真由美は聞いた。
「学校は行ってないんだ。『元』は仮卒したけど。副舎」
「要するに。どっぷりオーロラの奴なんだ。夕霧だったよね」
「礎（軍部）も。そっちの方が主流だな。霧は親父がアレだったから。あんま好きじゃない」
オーロラ世界のトップは、今４０年ほど夕霧という組織が独占している。
その夕霧を好きじゃないと選り好みできる精神と実力（？）を、真由美は気に入ったようだった。
「わ、凄い！　かっこいいですね！」
「ははっ、ありがと」
礼音はにこりと笑うと、すっと腰をかがめた。
ちゅ、と音を立てて、真由美の頬に熱がともった。
「……っぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

「礼音、親にしないことを知り合った直後の人にしちゃいけないと思う」
「あ、日本人ってしないんだっけ。俺日本にゃ年17、8回しか行かないからなー」
充分行ってるよ、と修治が溜息をついた。
「……ツルギノキミさんはしないだろ？　……ってことは、サンゴさんは何て言ってるの」
「『強い男は好き』だって」
「礼音、あなたフィールド思想でも持っているんですか……」
礼音に対する修治の言葉が、敬語に近くなってきた。
「ロシアンとかの？　無いよ全く。そういえばロシアもう15歳でしょ？　あの人相手だと普通に年上彼女だけど」
「……最近きすされるな……」
少し立ち直った真由美が声をこぼすと、修治が僅かに眉を上げた。
「誰に？」
「え？　えーと、初日に図書館で、……きれーな女の人に…」
「真由美ちゃん、座りにこ。クレープかパフェでも奢るから」
いい所があるんだ俺も行く、と礼音が先に立って歩き出した。

ｘｉｘ（後書き）

○登場人物○
『坂谷（さかたに）　礼音（レオン）』　男性。
赤毛に真っ黒の瞳。父親が日本人のハーフ。身長は１７５ｃｍもうちょっと。

○ちなみに○
人類→人間（ウィード）
ソーン
フィールド
フォード
ダーク
太陽人（デリシュ）
……進化論です。
動物界脊索動物門脊椎動物亜門哺乳綱霊長目ヒト科。

xx

「いーなー、Ｌｅｄｙ（レディ） Ｌａｃｋ（ラック）'ｓ Ｂｌｅｓｓｉｎｇ（ブレシング）！」
「女神の祝福？」
「そ。闇色の長髪に闇色の瞳。身長は１５５ｃｍ前後で童顔。母上殿その人だ」

（り、リルさんって凄い人だったんだ……若いのに、背も高くないのに）

修治、礼音は彼女の年齢について全く言及しない。
実は年齢について誤解している真由美の身長は、約１５３ｃｍだ。

「そういえばさ、分科会ないの？　今日」
「うん。明日恒例の討論会だからね」
「原稿作んなくていーわけ？」

特殊現象／能力の最終討論会は毎年恒例らしい。

「え、心配してくれるんだ」
「違う！！　お前次期議長とか言われてんじゃん！　真由美ちゃんの方！」
「大丈夫です。……多分」
「大丈夫大丈夫、昨日、二番で発言権取ってきてあげたから♪」
「「え！？」」

あはははー、と気楽に笑う修治が、真由美にはとても恐ろしく見えた。
緯度の高い夏は、どことなく清々しく思える。

真由美はストローでオレンジ色の氷を引っかいた。

その時、

『ミコ！？』

礼音が叫び、走った。

カフェのテラスから道に飛び降りた先に、１７、８歳の女の子。

『レオン…？』

彼を見つけた彼女の瞳から、一筋の雫が流れ落ちる。

礼音は彼女をそっと抱きしめた。

「修治、今日帰るからさ。…これ」

縦に折った紙片を投げ上げて、礼音はひょいと彼女を抱き上げた。

「じゃーな」

飛んで来たのは紙幣だった。

礼音はさっさと歩き去った。

真由美が見渡しても辺りに赤毛は見えない。

「……ありゃ振られたな、ミコちゃん」

「フられた？」

真由美は修治を仰いだ。

「そ。ミコちゃんはとある先輩が好きで、礼音はミコちゃんが好き

なワケ。……奢ってくれるって」

修治はヒラヒラと折り目の付いた紙幣を振った。

「そういえば最近ざわついてるね」

「あ、私も一昨日から友達と連絡がつかないんです」

「1年？」

「はい」

修治は一瞬、遠くを見つめた。

「庵就地区は今。河川派に手を出した奴らがいたらしいから…。櫻樹は遮夢が固めている筈だけど。――――後でオーティスにでも聞いてみるか」

なぜか周囲がシンと静まり返った気がして、真由美は慌てて声を出した。

「あ、あの！　三宅さんは明日の発言権取ったんですか？」

「うん、取ってきたよー」

「いつですか？」

「えーっと、ラスト？」

「にっこり」というのは、たまに怖い。

その頃、
地球でないどこかの地方で。

「明日行くんでしょ？」
「……一般にまじってきくだけでいー…」
「いーの、それで」
「んー……あさき、」
「何？」
「……コーヒーいれて……」
「きみ絶対依存症だよねー…」

そこでは、太陽が昇っている時刻だった。

xx（後書き）

ミコ→美輝子（みきこ）です。
ちなみに。姓は矢野（やの）。

ｘｘｉ（前書き）

皆様地震で大変なのに、こんなものを放り込むのはどうかとは思いますが、
あえて変わらずお届けいたします。

xxi

「きょ、今日って一般公開だったんですか！？」
「あれ？　言ってなかったっけ」
「聞いてないです……」

討論会の第二部が終わった、休憩時間。
真由美は暢気にショパンを聴く修治に詰め寄った。

「まあでも、綺麗に述べられたよね」
「おもいっっきり、緊張してましたけどっ」

革命って知ってる？　と、どうしても暢気で居たいらしい修治は、真由美の耳にワイヤレスヘッドセットの片方を引っ掛けた。
一応、校内は電波が規制されている筈なのだが。
気にしない方が身のためかもしれない。
激しい曲なのになぜか優しい不思議な音色が真由美の頭を駆け巡った。
もちろん、外部への音漏れはない。

「即興で返したにしては上出来だったと思うよ～」
「……ありがとうございます」

ショパンは身体が弱かったから、革命の暴動に参加することができなくって。
代わりにその怒りをこの曲にぶつけたんだって。
ちなみにこのピアニストは有栖創也（ありすそうや）って言う人ね～、
と言う様子からすると、彼はかなり好きなようだ。

「……ところで、あっちは何であんなに盛り上がってるんでしょーか」
「んー、これ、昨日の礼音のお釣り。そこの自販機でレモンティーの冷たいの買ってさ、持って行ってみな？」
修治はヒョイとヘッドセットを取り上げた。
（いーんですか坂谷さんの…）
声に出すと「いーんです」とにっこり返されそうなので、真由美は黙ってレモンティーを買う。
手を振る修治を見つけて歩くと、人混みの中に長身の美女を発見した。
（たっ、「高梨魔夜（たかなし まや）」様！？）
青味がかった銀という、「人間（ウィード）」には有り得ない色彩の髪をセミロングにした、「人間離れ」した美女。
特殊能力研究会礎軍部の女主人（ミストレス）。
そして、
「あ、来た来た。魔夜さん、こちら片岡真由美さん。世三（せいさん）の後輩。櫻樹高１Ｊ」
「へえ、きみか。よろしく」
飄雅闇衆の、女主人（ミストレス）。
「かっ、片岡真由美と申しますっ！　よろしくお願いいたします！！」

勢い良く頭を下げる直前、修治が紙コップを取り上げた。
「零れるよ、緊張しすぎ」
「……そんなに改まんなくてもいーのに」
顔を上げた真由美は修治からコップを受け取り、魔夜に差し出した。
「あの、これ、どうぞ」
「え、いーの？」
「いーんです。礼音の金ですから」
「ああ、ロケット花火軍曹のね」
「「ろ、…」」
ロケット花火もしくはぶっ飛び軍曹。
理由は軍部に問い合わせ、だ。
ちなみに幼少の頃から叩き上げた彼、今は曹長である。
魔夜は躊躇なく口をつけた。
「二部終わった訳だけど、どお？　二人とも」
「一進一退って所ですかね。三部で勝ちに持ち込みますよ」
「……がんばりますっ」
9時から2時間ごとに討論と休憩を繰り返している。
「三部で終わらないと明日に持ち込むからね。アイツらも最後まで見たいだろうし」
「あいつら？」
「……誰ですか、一体」

その得体の知れないモノは。
修治はそう言いたげだ。
「んー、三人というか、四人格というか…。三部終りまで居るだろうから解るよ、多分」
というか、騒ぎになるだろうね。
魔夜は誤魔化すように言うと、二人の背を押した。
「ほら、もう４５分よ？　遅刻しないでね」
まだ何か言い足りなそうな修治を制してから、魔夜は真由美に言った。
「紅茶、ありがとね。がんばって」
「あ、ありがとうございます！！」
僅かな心残りをそのまま、二人は会議室へと戻ってきた。
「あの人って、人間じゃないんですよね……」
「うん、フィールド。上位貴族だって聞いたけど」
『フィールド種族』は、人類であって、人間ではない。
人間よりも長命で、髪や瞳にかかる青色を特徴とする、能力の使用に長けた種族。
「タダの人間じゃ駄目なのかな……」
その呟きを拾った者は、幸いにも居なかったようだ。

ｘｘｉ（後書き）

○登場人物○

『高梨（たかなし）　魔夜（まや）』　フィールド、女性。

青味かかった銀髪に、青い瞳。身長は１７０ｃｍを少し越える。

特殊能力研究会と軍部に所属、飄雅闇衆メンバー。

二位貴族（ブラッド）に嫁いだ。

○単語帳○

とある言語における序数を０から。

クラウン、ヘヴィ、ブラッド、クロウ、エル、ラド、フェア、ウィン、ドゥラ、ラング、ダン、リン。

xxii（前書き）

春休みですね！！

こちら進級は致しましたが宿題がどっさりです。

xxii

『…以上より、私は特殊といわれる能力あるいは現象の、最内部人民の眼前における発現は可とすべきと考えます。もちろん、危害を加えるとなると別です。能力・現象の整理と共に、各法律の整備、そして、『人』の前提を変えることが必要だと考えます』

（…か――っこい――――――……）

真由美は、討論中にもかかわらず、ポワポワと異次元に飛んでいた。

静かで穏やかな物言いながら、なぜか逆らえない「絶対」を感じさせる。

修治の討論（というより、説得）の技術は賞賛に値する。

（三宅さんすっご――――――い……）

それに気付いたのか、真由美の向かいの席。

その後の公聴席に座った、濃い色の髪の女性がクスリと笑った。

（オーラ強烈だなー。あ、リルさんかも。…隣の人は誰なんだろ。寝てるのかな？）

長めの黒髪を右で緩く束ねた男が、暫定リルの左側からもたれかかっている。

時折何かを探すように、もしくはいぶかしむように、ふわりとした中にも芯のある視線を彷徨わせている。

碧い瞳が覗く。

眠っている訳ではないようだ。

隣の金髪の男性が、やれやれという風に眺めている。

『時間を借りたとすると、今度は身体に対し通常に無い負荷がかかります。ですから、そのような事態に対し早急に対処できるようにするためにも、』

討論会は、修治やその他数人の活躍により、３０分程早く勝ちで大詰めを迎えていた。

『……以上をもちまして、本年度の分科交流討論会を終了致します』

閉会宣言と共に、客が帰ろうと席を立ち始める。

始めた、途端。

がくん、と、抱き付くような形で真由美の正面、リルの隣の男の身体から力が抜ける。

その瞬間、陽が落ちた。

髪の闇が、空へと逃げる。

空の光が、髪へと宿る。

周囲は完全に静まり返り、

彼を見つめた。

『…はれ…？　あさき…エル……？』

長めの髪が、銀色に輝く。

顔を上げた彼の瞳は、澄んだ紫。

しまった、忘れてた！　という顔と、あちゃー、やっちまったな、という顔が彼を挟んでいる。

（どうする！？　逃げる！？）

（それ以外に方法無いでしょ）

３人（というか２人）は、騒ぎが大きくならない内にと、逃げの体制に入る。

だが、この『現象』は、この分科会メンバーには知られすぎていた。

『き、Ｋｉａ　Ｋａｓａｎａｇｉ……』

「笠凪岐亜（カサナギ　キア）！！？」

その言葉を皮切りに、

『う、嘘だろ本当に本人かよ！』

『遊色……本当だったのか』

『ちょっとっ、通してよサインしてもらうんだからっ』

会議室は混乱に陥った。

『朝輝ちゃん、跳べる？』

『う、うん大丈夫！　軍の特研本部に跳ぶよ、いいよね！？』

「彼」の隣には、いつの間にか立ち上がったリルがいた。

彼女の手には、いつしか漆黒の「カード」。

『るあ！　は大丈夫ね、エリオットさん、掴まって！』

抱きつく１人を片手で支え、カードを咥えて空けた手で、もう１

人の手を掴む。
掴んだ瞬間にはもう、
「き、えた……」
彼らの姿はどこにも無かった。
「…魔夜さん、何てことを……」
修治が真由美の横で呟いた。
また、消えた。
消えて、失せた。
自分の、目の前から。

「ヤバくなったら言ってってきみに言ったのに…」
「…あさき、コーヒー…」
「私はコーヒーじゃありません！　…離してくれないと淹れられないんだけど」
「いれたらはなれる」
「…エリオットさーん、ひっじょーに心苦しいのですが」
「お代にアレ貰っていくけどいい？」
「お願いします…。あ、ついでに私のも」

『朝輝（クシャリア）、居るのか？　……喰われているのか、物理的に』
「…物理的に。この人達睡眠の替わりに魔力食べるんです」
『……だろうな』

「…るあ剥がしてくれたのはありがたいんですけど、なぜに膝枕？」
『……眠い』
「ぁあなたもですかっ」
「っ！？　いらしてたんですか！　しばらくお待ちください、今お茶を」
「あ、エリオットさん、コーヒーは…」
『……どーでもいいから寝かせてくれないか…』

１０歳前後の少年と見える者が、溜息を吐きつつ自分の、今のクシャリアを見上げた。

xxii（後書き）

○登場人物○

一応。

『笠凪（カサナギ）　岐亜（キア）』　男性であることは確か。

オカルトと、超能力や魔力の接点について研究している。

特殊能力研究会から熱烈なアタックを受けているが、未だメンバーではない。

陽が上っている間は「岐臣（きみ）」（黒髪に碧い目）、陽が沈むと「瑠亜（るあ）」（銀髪に紫の目）という2つの人格を持つ。そのせいで親に捨てられたらしい（本人談）。

とりあえず、どちらの人格でもカフェイン依存症であることは確か。頭痛持ちで、1日14時間睡眠が基本。

飄雅衆の「ばけばけ」。「笠凪岐亜」というのは2人（？）のペンネーム。オランダ生まれらしい。本名は本人達が忘れたらしい。

xxiii（前書き）

あの世行きの往復切符とか欲しい。
往復の「復」が重要。

xxiiii

「…というワケで！　分科会は無事、終了致しました〜！！」
「何が「無事」だっ！　矢野姫君や坂谷御曹司、高梨魔夜に果ては笠凪岐亜だと！？　どこが無事だ。良く生きて帰ったもんだ」

2学期。
始業式を終えて、教室は僅かに騒がしくなった。

「分科会の後さ、教科書類持って直で帰ったんだよな」
「うん、なっちゃんにもおとーさんおかーさんにも会いたかったし。何か顔見ないと調子出ないんだよね。やっぱ家族っていいねぇ……」

喧嘩ばかりの妹、奈津美(なつみ)も、真由美の大切な家族だ。

「そういえば土居(どい)くん居ないね」
「交換留学で嫣戍に行ってる。休み前に言ってたろ？」
「ごめん。全く……」
「奴、存在感薄いからな……。よく居ないことに気付いたな」

「みんなおはよう！　席に着いて」

「…暦ちゃんいつもいいトコで来るよね」

「せんせー席替えしてくださいっ！」

席に戻る真由美と入れ替わり、竜貴が叫んだ。
後の真澄は良いにしろ、その後ろの酒井楓が物凄いプレッシャーらしい。

「席替えはしますよ、でもそ　の　ま　え　に！　斉木くん入ってー」

え、という顔をする1Jメンバー達。
やはり、土居融（とおる）は忘れ去られているらしい。
驚くクラスの風を無視して、入ってきたのは明るい茶髪。

「交換留学よ、斉木孝文（さいきたかふみ）くん。……よね、受理されたのは」
「はい、それで合っています」
「……ということで、今学期一緒に勉強します。じゃあ何か一言」

僅かに違和感を主張する暦の横、深緑の目でクラスを見回す。
彼は不自然なほど綺麗な日本語で言った。

「庵就から来ました、よろしくお願い致します」
「……じゃあ、どうぞ。席替えのくじよ。みんな荷物纏めて！
端から行きます！」
「……先生」

教卓の前。
何となく言い難そうに、孝文がガラスの棒（くじ）を差し出した。

「これ…」
「あ、引いちゃった？　最後に引き直しです……」

早々、一本しかない外れくじを引いてしまったようだ。

「ぁあああああスミぃ――――――！！」
「…うるさい」

結局。

「さ、ささささささ酒井さんっと隣ですか！？」

竜貴は秀才から逃れられなかったようだ。
ちなみに後ろは匡征だ。

「斉木くん一番後ろで大丈夫？　まあ片岡さん居るから大丈夫かな？」
「はい、ありがとうございます」
「……」
「……へ？」

真由美が右を向くと、暦が孝文と話していた。

「片岡さん、よろしくね？」

暦、にっこり。
最近、なぜか正体不明の圧力を伴うこの笑みは、生徒たちの間で「暦ｓｍｉｌｅ」と名付けられた。

「あーえっと、片岡真由美です。よろしくお願いします」
「よろしくお願いします。孝文もしくはトールです」

チャイムが鳴る。
言った彼は机に突っ伏し、言った。
「なぁぁにが標準語や、いちーちいちーちめんどいやないかっ、ぼくの喋るんが日本語やて……」
真由美、唖然。

「いくいくいくいく！　ほみもいくのおーっ！」
「ほみ、一応おかーさんも社長さんなんですカズも居るんです忙しーんです」
「だってほみもいきたいんだもん……」
「……チェシャに言ってみなさい。もしかすると連れて行ってくれるかも…」
「やったぁ！！　ちぇしゃ――――！！」
「…呼んでも来ませんよ、おとーさまじゃないんだから」
「そうそう、喚べるのは朝輝だけ、喚ばれて来られるのは俺だけだから」
「……呼んだっけ？」
「喚んだよ、「おとーさま」って。あーやっぱこの抱き心地が最高――……」
「ほーみちゃ――んっ、オニーサンが遊びに来、……と。お邪魔だな。遊びにこ？」

「んん！　ちぇしゃおまつりこ？　おまつり！」
「おまつり？　…ああ、世三系の学園祭か。ちゅーしてくれるんだったらいーけど？」
「喰うなよっ」
「お前と一緒にはされたくないっ！　…とりあえず。ほみ、行こうか」
「んん！　いく――――！！」
「チェシャよろしくね――」

「……ということで、あさき」
「…はい？　……まだ朝なんですけ、……どっ」
「それが何？」

とある地方で。
ここでも「にっこり」は、圧力を伴う。

ｘｘｉｉｉ（後書き）

「チェシャ」、来てるじゃないか。

○登場人物○

『斉木（さいき）　孝文（たかふみ）』　男性。

父方の祖母と母親がアメリカ人。本人の中身は日本人。

身長は１６６ｃｍ、明るい茶髪に深緑色の目。

性格を一言で表すなら、そそっかしい。

xxiv（前書き）

今回ちょっと忙しいです。

xxiv

「……えー、そーゆーことなんで、実行委員は瀬尾(せお)くんよろしく」

何がなんだか、クラス委員に祭り上げられてしまっている匡征が教卓の前で言った。

「りょーかーいー……」

「……で、次。研究発表は」

「ロシア文学！」

「異議は」

「なし！」

「でいいのか？　各自適当に資料持って来い。最後に文化発表だが」

面倒臭くなったのか、異常なほどにサクサクと進めていく匡征。

しかし、

きーんこーん……

「「「鳴ったっ！！！」」」

「スミ早く！」

ＬＨＲ(ロングホームルーム)終了と同時に、何人もが駆け出した。

珍しく身体を動かすことのできる第三講堂へと。

（先生、すぐに行きます！！）

ちなみに、１学期にやったのは受身だけである。

「前回とったアンケートについて確認したいのだが……、全員最後まで受講、で良いのか？」

例によって胡坐をかいたネイが、全員を見回した。

「止めるのならば今のうちだ。本当にそれで良いのか？」

ネイにとってこの結果は、驚くべきことであるようだ。動きを見せる者が居ないのを見て取ると、ネイは教師として提案をした。

「……ならばやり方を変えよう。三年間通してのメニューにする。斉木も入るんだな？　各学期の初めに組み直すことになるが、一旦ペアするぞ。組み手ができる」

すっと立ち上がったネイは、名簿を見て名前を挙げていく。最初から決めていたようだ。

「み、御浜さん、よろしくお願いします」

「……ええ、わかりましたわ」

「適当に散らばりたまえ。レベル別に分けた心算だ。クリアしたペアから次に移るぞ。課題は……」

こちらもハードになりそうだ。

「文化発表は模擬店で通った。シフトだが……」

第七限の暦の授業がＨＲ（ホームルーム）になった。

「片岡ー！　俺料理できねーから一緒に居てくれ――っ！！」
「私はスミとず――っと一緒に居るんだからっ！！」
「プロポーズのし合いは外でやれっ、三人退場！！」

「勝手にオレを巻き込むな！！」

Ｊクラスは各学年とも一番騒がしい。
逆に、Ｉは静まり返っているらしい。

「黙れ！　…とりあえず、ある程度料理の腕と知識のある奴名前書きに来い」
「その定義は！？」
「一日自炊できる奴！　怒らねーから書きに来い。瀬尾、仕事しろ」

匡征がキレ気味だ。
暦が居ないこともあって、もう誰に対する遠慮もないのだろう。
実行委員・瀬尾奈幹（なみき）は基本、寝ている。

「マユ、オレの名前書いたんなら自分のも書け。ついでに愛洲も書いとけ」
「それこそ勝手に巻き込むな」
「オマエ今家メシ屋だろ？」
「俺と家とは関係ないだろ」
「お二人さん仲良いねぇ。……退場？」

「俺は被害者だっ！！」

「つーことでッ」

がんっ！！　と、不必要に大きな音がした。
匡征が教卓を蹴った。
投げた１ｃｍ直径のチョークは、見事に奈幹の頭でバウンドした。

「できる奴適当に混ぜて名簿作るから、上から順に店五人、教室二人、ローテーションすること」

匡征は、実は世話好きで人が良い。

「今の説明で解らなかった奴！！」
「「はいぃっ！」」

何人かが反射的に答えた。

「解るように努力しろ。以上！」

真由美がふと隣を見ると、孝文が絵を描いていた。

緩くデフォルメされた、……教卓を蹴った瞬間の、匡征。

「う、上手っ…」
「あー、ありがとう？」
「瀬尾起きやがれッ」

チャイムが鳴った。
本日はこれで終業。

ｘｘｉｖ（後書き）

ということで、前回の予告（？）通り、学園祭の時期です。
残念ながら、体育大会系は無いのですが、学園祭はがんばります。
地味ですが。

○登場人物○
『瀬尾（せお）　奈幹（なみき）』　男性。
身長は１７０ｃｍ程度。赤っぽい黒髪、ボサボサ。
とりあえず常に寝ているが、眠っていることは少ない。一応頭は良い。
ちなみに実行委員は立候補。

xxv（前書き）

予約するのを忘れてました……。

xxv

「よしっ、来週もう学園祭！！」
「中間どうだったんだよ。ロクに勉強してねーだろ」
「そんなの捨てたよ、とっくにねっ！」
「…捨てんなよ。ってか拾えっ」
「竜貴オマエ人に言えんのかよ」

気楽だ。

「言うことはできる。言ってどうなるかは保障しないっ！」
「聞いたことあるぞそれ」
「返し方ちょっとズレてない？」

コイツら気楽だ…っ！　と拓夢が呆れている。
匡征は猫ネコね子寝コと白昼夢にうなされている。
入学祝に貰った本は既に焼却済みらしい。
ちなみに、彼は猫がという動物が嫌いなわけではない。

そして、

「相変わらず上手いねぇ…」

孝文が無情にそれをデフォルメしていた。

「クラス委員お疲れー。最近よく死んでるなー。もしかしてホントに疲れてんの？」
「……主に精神的にっ！　お前と瀬尾と猫のせいでッ！！」
「全部尾がつくな」

「猫って二足歩行の？」
「……以外に何がある」
とりあえず、皆気楽だ。
「そーいやさ、職員棟の裏口の油絵ってお前の？　…おーい、斉木？」
拓夢が急に、別の話題を振った。
「……そう」
「油絵！？　すごいっ！　見に行ってくる！！」
「あ、俺も行く！　斉木、お前も道連れだっ！！」
今の孝文の絵は写実的な女の子だ。
スケッチブックを持ったまま、彼は竜貴と真由美に引っ張られて行った。
「で？　あいつらの前じゃ言えないことがあんだろ？」
三人の足音が消えた頃、真澄が拓夢に聞いた。
「お前らの故郷（くに）辺りに河川の巣ができている。今は句眼（ガン）で張っているが……。なぜケベックで手を出した？」
「知ってたのか。…飄雅を動かすのを手伝って欲しいと言われたんだ。でも、……なんであそこに？」
「それが解れば早いんだが……」
真由美の家族とか友達とかが居るのに！　と真澄は頭を抱えた。

「片岡もそうだが、お前は？」
「こっちは皆どこぞの土ん中で惰眠貪ってやがる。最後の一匹が、」
耐えられないとでも言う風に真澄は言葉を切る。
それに匡征は複雑な顔をした。
何事も無ければいいんだが、と拓夢が呟いた。

「す……、ごい…」
わずかに、薄く残った雪。
その上には、子供の足跡。
針葉樹と、黒いＳＬを覆う屋根。
細く続く泥の道には、ブランコとシーソーの影がある。
一点透視のようにも見えるその絵の中心は、冬の空にあって輝く蒼い太陽だった。
「すごい……。なんか懐かしい感じがする。……これって女の子？」
右奥の木の陰。
横で髪を結った影がうっすらと見えていた。
「そう」
「児童公園みたい……」

はああぁぁ、と孝文が特大のため息をついた。
書き終えた紙をスケッチブックから破り取る。
それを真由美に押し付けて、廊下の奥へと消えた。

「わっつ児童公園」
「私が小2の時までいたところの公園なんだ。SL置いてて」

竜貴に答えつつ、紙を表向ける。
向けて、固まった。

「うわリアル！　これちょっと片岡に似てんなー」

真由美は、言った竜貴につられて固まった。
余所行き風のブラウスを着た少女が、

「これ、……私」

誰かに微笑みかけていた。

xxvi

「スミたません！　３Ｈたませんっ！！」
「オレはたませんじゃないっ！　それと先に店番！！」

ぁあああ……という真由美の声を残しつつ、真澄は真由美を引っ張って店へと歩いた。

「悪い、コイツ引っ張ってたら少し遅く……」
「りゅーきくん！！　３Ｈたません！　たませんだった！！」
「なに！？」

竜貴はタオルを放り出すと財布を引っつかみ、玄関方面へと走り出した。
一応、まだ始業前だ。

「マユ、オマエなんで貴重な労働力を……」
「あー……、ごめん」
「とりあえず、やれ。時間が無い」

隼斗が布巾をたらいに投げ込んだ。
櫻樹は何事も公平にしない。
寮や設備は特進クラスの方が僅かに良く、授業量も多い。
逆にクラス費は低く、したがって行事事に回される資金も少ない。
しかし、
「金科（カネカ）に勝つぞー！！」

それでもＪはかなり盛り上がる。

ちなみに金科とは、普通科持ち上がりのＡ～Ｆクラスまでの俗称（？）である。
戻ってきた竜貴が、孝文から生成りのエプロンを受け取りつつ叫んだ。

「たませんどーなった？」
「１０時半に取りに来いだと。運良く知り合いが居た♪」

３Ｈの雰囲気は、かなり１Ｊに近いらしい。

「とりあえず、早くしろ」

学園祭一日目は、元々は予行練習の予備日で、そのため関係者以外立ち入り禁止だ。
文科系の発表があるのも１年だけで、２、３年は校内清掃や研究発表のリハーサルをする。
一日目の、店番一組目が名簿順に竜貴、真由美、孝文、隼斗、真澄だった。
簡単そうということでクレープ屋（？）になった。
のだが、

「ぁあああああっ、微塵切りすなっ！　つぶすなオマエは出来の悪いフードプロセッサか！？」

早速一人に問題発生。
仕事を変えてみる。
が、

「破れてるってやぶれ、わお！　ひっくり返してっ焦げちゃぁあああ！！」

「悪い、俺世界一不器用なんだ♪」
「先に言えよオイ！！」
尾上竜貴は料理分野における才能ナシと自己暗示をかけているようである。
「マユ、なんっにも気にする必要ねーから、竜貴にパフェの盛り付け極めさせろ」
「りょ、りょーかい……」
二人の考えは一致していた。
コイツにクリームをホイップさせてみろ。
全員真っ白かクリームが紫色になる…。
失礼だとは思わないのだろうか。
「…オマエ妙に器用だな」
「……」
画家（孝文）が芸術的なまでの円形を、通常より大幅に少ない生地で作り上げていた。
太陽の横に花火が上がる。
秋の風に乗って、甘い香りが広がった。
午前9時。
学園祭、開始。

「そーのだぁ、暇じゃない？　何か買ってこよーかぁ？」
「脇村（わきむら）さん、暇だけど、1時間だけだから。当番抜けるのは駄目だと思う」

今、1Jには見学客が全く居ない。
端で奈幹が眠るのみだ。

「あーでもじっと座ってらんないしー！」

そんな勝手な、という園田優（そのだゆう）の思いをよそに、脇村七海（ななみ）は地団駄を踏むように足を鳴らした。

「もー無理！　そのだ、何か食べるの買ってくる！！」

七海限界に達したのか、バッと立ち上がると後ろ向きに歩き出した。

「わ、脇村さん……」
「だーいじょうぶだって、すぐに戻るからっ」
「そうじゃなくてっ」

しかし彼女は扉の前で、

（後に鬼が！！）

どん、と、

「何が『大丈夫』だ。これやるからあと４０分静かにしてろ」

匡征にぶつかった。

渡されたのは、二つのクレープ。

「か、神だ……」

かなり違う気がするが、七海はそう呟いた。

その耳に、

「オイ瀬尾このクソヤロー委員会サボりやがってからにっ８階まで階段引きずってやろーか聞いてんのかこんチクショーがっ！！」

その「神」の怒鳴り声が響いた。

実際やりかねないのが大柄かつ怪力の彼の恐ろしさである。

ちなみに、ここは１階だ。

xxvii（前書き）

……誰が誰だか。

xxviii

「ぜっったいに居たんだから！！」

3日目。

真由美の声がクレープ屋から響いた。

「なになに？　何が居たの！？」

会話において、意味上の主語はとても重要だ。

「ネコミミのちっちゃい女の子！」

最終日始めの調理メンバーは、隼斗、真澄、優、七海、拓夢だ。

「うそぉ――！！」

七海が叫んだ。

この2人も気が合いそうだ。

「……青い奴じゃなかったか、これぞ究極のロリって感じの」

「……」

拓夢が恐る恐るといった風に聞いた。

少し離れた所で優が微妙な顔をしている。

真由美は拓夢の言葉に飛びついた。

「そう！　あれ何のコスプレ？　あんなキャラ見たことないよ！？

元キャラは大人？」

「……空猫（そらねこ）。将来的に大人にもなると思う」

ガコンと酷い音がして、空のボウルが転がった。
隼斗が一瞬の後に再起動する。
その顔は引きつり気味だ。

「そのまんまなネーミングだね……。それでねっ、頭が赤い背のたっかい人が来てね、」
「まゆみ、赤毛って言おうよ……」
「『ほみ、勝手に歩き回るなって言ったろ？』って言った！　聞き取れた！」

七海の言葉も聞き流して、真由美は妙に興奮していた。
聞き取れたことに感動しているようだ。
だが、他の者にとってはそうはいかない。

いつの間にか店の前の椅子に座っていた匡征が聞いた。

「……そいつは赤と言うかワインレッドの髪で、猫みたいな金色の目で、浅黒い肌の、俺よりかなり背の高い奴じゃ、なかったか？」
「うん、あの身長は絶対日本人じゃないねっ！」

真由美が返した瞬間、パフェを渡そうとしていた優を含む全員が固まった。

「……まゆみ、四天王って知ってる？」

ぁあぁぁぁぁぁあ、と匡征が片手で髪をかきむしる。
七海は呆れ顔だ。

「は、橋本くんどーしたの！？」
「こーくん猫アレルギーなんだ。知ってた？」
「こーくん言うな！　知ってんなら引っ付くな！！」
自分で言ってるよ？　と言う彼女は、匡征の首に後から手を回していた。
椅子はいつの間にか持ち去られ、１脚だけになっている。
「大佐っなぜここに……」
「レイディ！」
「り、リルさん！？」
「……重い」
「失礼な。私そんなに重くないよ？」
「俺も軽いぞ！！」
「ぐっ……」
「わっ！！」
人口がどんどん増えてゆく。
匡征の上にリル、更にその上に、……見覚えのある赤毛。
「……大佐の上に平気でのしかかる少尉って始めて見たぞ」
隼斗が呆れ気味に溜息を吐いた。
ロケット花火軍曹改め曹長、軍部秋の除目で更に昇格したらしい。

「やーやーレオンくんお久し振りー」
「姐さんお久し振りー。やっぱりあいつらって結局仲良いですよねー」
「くされ縁って言うんですかねー」
「くさりの縁ですねー」
「鎖じゃねーっ！　腐ってるの間違いだろ！？」
「重いてめーらどきやがれっ！！」
匡征が切れた叫びを上げたせいで、真澄の叫びはかき消された。
「えー俺らこんなにスリムなのにー？」
スリムだとしても人間二人も乗れば重いだろ！？
匡征の心は通じているのだろうか。
「あーそういえば皆様おはよーございます？」
「ついでに俺からもおはよーございます？」
「っあ――！！　礼音、何で居るんだよっ」
うるさい奴らがやって来た。
1J店番その他諸々の心中が揃った。
孝文に荷物を持たせるな。

ｘｘｖｉｉ（後書き）

○登場人物○

『園田（そのだ）　優（ゆう）』　女性。

身長は１５５ｃｍ前後。柔らかい茶髪の、少し内気ないたって普通の女の子（の、はず）。

現在、入学式での一目惚れから絶賛片思い中。行動に移すだけの自信は無いらしい。

将来の夢は色々なジャンルを扱う脚本家。

『脇村（わきむら）　七海（ななみ）』　女性。

金髪に染めはしたが、薄化粧の中途半端なギャル系。中身は真面目で純情（本人談）。

身長は１６０ｃｍ位。

ＤＮＡの虜な理系女子。

xxviii（前書き）

メンバーは前回をご参照されたし。

xxviiii

「やったぜ竜貴！」
「なんで居るんだよっ！」
「ミコ捕まえたぞ！！」
「別にそんなのどーでも……なんだって！？」

赤毛と焦げ茶（ほぼ黒）金メッシュが叫んでいる。
夕霧組だ。

「……なんで腐れ縁なんですか」
「意思にかかわらず一緒に居るんだからそうじゃない？」

真澄がぶつぶつと文句を言っている。
そういえば、と返したリルが匡征に声をかける。
何か思うことがあるようだ。

「こゆちゃんがさっくん連れまわしてるけど。あれ？　逆かな？
まあいいや。第三講堂の裏辺りに居たかな」
「嘘だろ……？」
「まじです。生憎と」

１Ｊメンバーの見送る中、匡征が駆け出した。
興味津々の多数の目に晒されているというのは解っていたのだろうか。
礼音が一脚きりの椅子を占領した。
その後から首を伸ばしつつリルが言う。

「金券あるんだけど、使わなきゃもったいないよね。パフェいくら

？」
「金券……買われたんですか……」
「まさか。姉とこゆちゃんに貰ったの。半分チェシャに渡したけどね」
真澄はやや表情が引きつり気味だ。
使い捨てのカップを用意しながら、「姉」なんか居なかったはずだがと隼斗が呟く。
その足元で、もしかするとあの人のことじゃないのか、とごく小さな声がした。
「いーなーパフェ。俺もほしー」
横（間？）から礼音が口を出した。
「よし、おねーさんが買ってあげよう。ミコちゃん来てるでしょ、持ってってあげてね。イチゴが好きなんだったっけ？　礼音くんはどうする？」
「チョコバナナアイスのクレープの方でよろしく！！」
ひたすら元気だ。
「……脇村、抹茶そっちだよな」
金券１３枚、と隼斗が言った。
「なんで抹茶？」
「ハーゲンダッツだから。以上」
「そう！　さっすがナカシマくん。この４年は伊達じゃなかったってことだね。よくお分かりで」

「……嬉しくない」

うんうんと頷くリルを見て、真由美が入って行った。

「リルさん！」

「やっぱり朝輝（あさき）でお願いします♪」

「それじゃ朝輝さん！　あなたは猫とハーゲンダッツ抹茶が世界を救うと信じますか！？」

なぜか妙にテンションが高い。

意訳すると一応、猫とハーゲンダッツ抹茶が好きですか、となる。

なのだが、

「ハーゲンダッツ抹茶はこの世の至宝と信じます。猫は世界を救えるように常々努力していると誓います！」

意味が変わってきている。

「あたしも！　ハーゲンダッツ抹茶はこの世の神だし、猫（あさき）さんとその旦那様が世界最強だと信じます！！」

七海も加わった。

もう既に「猫」に関する意識が全く別物である。

真由美としては単に猫好きかどうかという問題。

朝輝は猫（ソーン）と呼ばれる種族のこと、七海は完全に朝輝個人と特定してしまっている。

「……おい花火、パフェとクレープできたぞ」

朝輝さん結婚してるんですか！？

あの人を最強と言わずして何を強いと言うのか、って感じだよ、会ったことないけど、
と騒ぐ真由美と七海を尻目に、隼斗が礼音に声をかけた。
彼も軍部関係者のようである。

「やだなー俺もうちゃんと大人だって、１８にもなって流石にそれはつらいよ」
「だからロケットを抜いてやってんだろーが」
「少尉に喧嘩売る軍曹も珍しいと思う。じゃーなっ」

パフェとクレープを両手に去る礼音。
空いた席には朝輝が腰を下ろした。

「ふー、やっと席空いた……１３枚だった？　はい」

匡征に情報を、礼音にパフェとクレープをやったのは、唯単に席が欲しかっただけらしい。
竜貴が声をかけた。

「朝輝ねーさんお疲れ？」
「お疲れー。姉を探して三千メートル。もうトシなのにさ……」
「念に１歳年取ってないじゃないですか。精神年齢だけですよ」

本当だとしたら怖いな、と真由美は思った。

「ぁあああ自由に空を飛べたら！　って時々思うよ。我が姉思いの弟は飛んでるけど。今度貰ってみよーかな。要る？」
「いーえいりません！　俺は俺の方法で跳びます！　これだけは尾上竜平を見習います！！」
「変にアシにされないでね。じゃーねーたっくん……」

朝輝はフワフワと歩いていく。

残念ながら見つかっていたらしい拓夢が、やれやれと立ち上がった。

xxix

「あれ？　朔（さく）また来たの？」
「そりゃね、こゆの居るところだから？」

第三講堂裏にて。

「でも仕事あるんですけど」
「現場監督だろ？　一緒に居れると思うけど」

充電させてー、と抱きついた長い髪で、暦は三つ編みを開始した。

（……なんかもう……毟りたくなるほどキレイな髪ねー……）

サボり魔と言われようとも、伊達にオーロラ保安部の会頭などしているわけではない。
暦の殺気（？）にはもちろん気づいているが、朔夜（さくや）は彼女の好きなようにさせる。
殺されるのなら本望だ。

「おかーさん！　ってあれ？　何でおとーさんも居るの？？」

ひょい、と少女が顔を出した。
年の頃は母親の教え子と同じくらい。
朔夜がくぐもった声を上げる。

「悪かったなーおとーさんが居てっ」
「そんなこと一言も言ってませんー。お父さん拗ねないでよ」

言いつつ彼女はべりべりと父親を引き剥がす。
世界的に見ても大柄な父親の影から現れた、日本人としては平均体型の母親に言う。
「おかーさん、金券ちょーだい。あたしパフェ食べたい！」
「……ごめん明矢歌（あやか）。朝輝ちゃんに全部渡しちゃった……」
ぁあああああ、と悲鳴を上げて、明矢歌は暦を揺さぶった。
「朝輝ねーさん今どこに居るの！？」
「確かネイのところに行っ……こうとしていたはず。ネイはわからないけど、去年は院に逃げてたと……」
「だったら会えない……。って言うか大学院って立ち入り禁止でしょ！？」
「リルは理事会にも学会にもツテがあるから大丈夫。セシルもどこかに居るはずだし」
一応、義務でね。
朔夜が口を挟む。
剥がされても懲りずに、今度は暦の背に張り付いた。
「ところで金券っていくら？　日本円で買えるわけ？」
「……多分」
「た、多分って教師が言っていいのか……？」
妙に自信なさげな暦の言葉に反応したのは生徒、匡征だった。
「匡征！！」
「あ、明矢歌！？」

珍しく本気で驚く匡征を見て、明矢歌は笑った。
擬態語で表すなら、にやりと。
「匡征、金券持ってたりする！？」
「ああ、一応……」
「あれ蓮ジュニア。なんで居んの」
答える匡征の言葉を遮り、朔夜がきいた。
「一応、ここの生徒なもので」
「そういやそうだっけ？　どこぞの馬鹿が言ってたよーな」
『どこぞの馬鹿』、実はネイのことだったりする。
「で？　何か用？」
「……いえ」
用かと聞かれて言うような用もない。
人好きのする性格でないのは充分自覚しているのでなおさらだ。
「明矢歌、」
呼ばれた彼女は、ん？　と顔を上げた。
「……昼頃、一緒に居れるか？」
戸惑いつつ不安げに聞いた彼に、

「うん！」

彼女は笑って頷いた。

しかし、

（いーねー若いって）

（これで遅刻したら1ポイントマイナスだけど）

彼に向けられる審査と監視の目、2組。

「橋本くん、ギリギリですわよ？　……どうしたのですか、息を切らせて」

気遣わしげな美園に、

「5分前集合は常識だよー。だめだねえ、『こーくん』」

にやりと笑った七海の言葉に、

「そーだよ『こーくん』、クラス委員なんだから」

真由美が平気で乗っかった。

「会えたのか？」

大体の事情を知る隼斗が声をかけ、『たっくん』……ではない、拓夢が同情の目を向けた。

ｘｘｉｘ（後書き）

笑撃（ショーゲキ）の事実発覚（笑

暦の周囲の話でしたー。

○登場人物○

『並木（なみき）　明矢歌（あやか）』　女性。

暦の娘、一人っ子。嫣戍高２年。

匡征とお付き合い中。親同士に付き合いがあるので、一応公認。

父親似の灰色の髪。

『並木（なみき）　朔夜（さくや）』　男性。

暦の旦那。保安部会所属。というか最高責任者。

身長１８６ｃｍ。長い灰色の髪、僅かに青味を帯びる。

昔からサボり魔だがやるときはやる。従姉弟２人には勝てないらしい。

『夏目（なつめ）　朝輝（あさき）』　女性。

前回書き忘れましたので。

青闇色の瞳、長い黒髪は実は偽物。身長１５４ｃｍ。

実は既婚者、子供居ます。旦那は世界最強。

ｘｘｘ（前書き）

いつの間にか３０話です。

xxx

「暦ちゃんって割りと曲者だったりする？　ってゆーかテスト三回同じ順位って……」

「愛洲なんて全部同じ順位だぞ？　並べて書くと一直線」

うわえげつないなどと無責任に言う真由美の横で、孝文は今日もスケッチブックに向かう。

「トール、って、トーランド？」

は？　という顔で真澄が振り向いた。

真由美が見つけたのは、スケッチブックの端。

「ねーこれ誰の名前？　斉木くんの？」

「……そう」

「……斉木くんってあんまり喋らないんだね……」

「……違（ちゃう）う」

孝文の発音が変わってきた。

何だコイツとばかりに注視される中で、彼は叫んだ。

「語学留学！　なぁぁにが日本語喋れるよーなって来いやクソジジーがッ！　ぼくが喋っとんのが日本語やて！　日本語以外の何なんや！！　ぼくは生まれた時からこの言葉を日本語やと思て喋って来たんやのにからっ」

真由美真澄、共に唖然。

「教えた本人が『それ日本語ちゃーうねーん？』ってなどーゆーこっちゃ。ほんっっまにっ、尾上のイチゴとおんなしよーにしたりたいわ！！」

あーアレは酷かったな、と一月半前のことを思い出した匡征が呟いた。
実はもう一人、惨禍を呼び込んだ者が居たことは孝文は知らない。
孝文は嫣戍行きたかったのに、びっちり絵ぇ描きたかったのに、仕方なしで来て久し振りにおーたら忘れられとるしっ！　とぶつぶつ唱えている。

「知り合い？　えー誰、……私？」

じと――っとした視線は真由美に注がれている。
孝文の喉に濃い色の液体が、次いで白色のものが消えてゆく。
いつの間に、と匡征が自分の左手を見る。
どうやら彼のコーヒーだったようだ。

「ほんまに……忘却は罪やわ……だぁぁれもぼくのこと覚えてへんし、ぼくはもう記憶の博物館行きなんやろか……覚えてそーなんはみんな死んどるし……。ほんまぼくはなんやねん……」

彼からは「悲愴感」という物質が発生しているようだ。
割と詩的な言葉を紡ぐが、詩人とほとんど同じ名の、彼の「師匠」は一切何も教えていない。

「な、泣き上戸？」
「あーあ、アイリッシュが……」
「オイそれマジで酒なのか！？」

饒舌な孝文に驚く真由美、最早諦めの匡征に、酒に良い思い出のない真澄が怒鳴った。

「ホールで売っているやつだから早々強くはないはずだが」
「強くない？　酒、酒なんだな！？」
「ホールでそんなの売ってていいの？」

「それよりも、」

ガラリと扉が開いて、入って来たのは隼斗。

「トーランド・ラゾルバック。……本人か？」
「……紋章画家の弟子か、コイツが？」
「一応（いちよー）免許皆伝もらっとる。タダの弟子やない」

愚痴るように孝文が言った。

「ほんま酷いで、どっこも行かへんゆーてたのに、当日誘われただけで行くとか！　きみるあエルリルてチームなんかっちゅーほど……」
先ゆーといてくれたら分科会サボったのに……と嘆く孝文。
それを見た真由美の脳裏に、いつかの映像が浮かぶ。

（ばーちゃん先ゆーといてくれたらガッコいかんとてつどーたのに）

居なかったか、こういう奴が。

「たか！！」

はあ？　と今度は数人が真由美を見た。
「たかやろ絶対！　ほんま酷いでって」
「遅いわまゆ！」
隼斗が物凄く面倒臭そうな顔をしている。
「どこ行っとったんよっ」
「アメリカ戻っとったんや、そっから弟子入りやなんやで色々行って。まゆ何やっとったんよ」
「あれの勉強しよと思て。……あ、チョコあげれんかったな……」
「八年も前のは要らんで。今度貰いに来るけどっ」
「来る？」

実はその昔、シルバーキラーなどと呼ばれ高齢者に非常にモテていた再従兄（はとこ）。
その最後の言葉を不思議がる真由美に、孝文は当然のように答えた。
「せや。留学て今年いっぱいやからな」
「えええええ！？」
「あー、大佐？　俺です。――詐欺じゃありませんって。…俺だ！――――仕事用のしか出ないだろ！？　……あー、トーランド・ラゾルバックが拗ねてます。討論会に連れて行って貰えなかったと――――、――……。…送り込んだの、貴女なんですか」
隼斗の電話の向こうで、違うよー、と朝輝が笑っていた。

ｘｘｘ（後書き）

孝文のは大阪弁のつもりです。
……多分というか絶対、おかしいと思います。ごめんなさい。
真由美のは少し違います。

そそっかしくておっちょこちょい。孝文は自分で留学の手続きを間違った。
ちなみに師匠はエリオット・トーマス。逆ですね。
分科会編（？）で朝輝＆笠凪岐亜と一緒に居た人。
ちなみに私はＴ．Ｓ．Ｅｌｉｏｔさん、かなり好きです。

xxxi（前書き）

遅くなりまして……
只今土下座中。
もし読んでくださる人が居るのなら。

xxxi

「確かお父様が日米ハーフでねー。でも思いっきり大阪弁なの。で、語学留学に送り出したと……」

「大佐！」

「……霧に居る私はタダのジェインよ。もしくは夏目朝輝。大佐はやめてね、ソロモンくん。……で、なに？」

いささか不本意な呼び方に朝輝が、電話を切らずに振り向いた。

「グレイス教じゅ、……王妹（キャシュア）から、連絡が欲しいと」

「ジェア？　なら少々放っといても大丈夫でしょ。それにしてもなんでここに居るって分かったんだろ」

「いえそれが、至急、お話したいということで。……『ゼン』から接触があったと」

「ゼン……そうか」

口の中でその名前を転がす。

数年前に、最後に対峙した時の姿が脳裏を掠める。

「あいつも、義理立てはするのね」

「朝輝！　聞いたか！？」

バッと開いた扉から、金髪の男が飛び出した。

ガッサさん！？　とソロモンが、自らの主の名を声に乗せる。

「聞いたよティガくん。女郎からだけど。そっちはルディから？」

「ああ、兄からだ。霧にできる事はないか？　あれで手を引いてし

まっているんだ！！」
「ティガくん、解るけどとりあえず落ち着いて。トップがそうでどうするの」
二人の中では今も、数年たった今でもあの盲目の男の姿が鮮明に生きている。
「兄上……、後成王とマキシムくんに連絡して。私で外部に連絡する。ルディからだったら四天王系は通ってるんだよね」
「そのはずだ」
「なら闇系と飄雅につけとく。……それにしてもジェア、」
やっぱり殺せなかったんだね、というのは喉の奥へと押し込めた。
「やはりあの女に任せてはいけなかったんだ……っ」
ガッサが低く呻った。
朝輝は珍しく、彼の元先輩を貶す言葉を咎めず、――認めた。
「ゆーさんに申し訳無いとか、思わないのかな」
私は絶対に有り得ない。
一瞬、困惑するソロモンに目を向ける。
朝輝ははっきりと言い切った。
「内部頼むね。皇帝には私から入れる。私は軍部か青（アオ）の家に居るから」
「適当に判断（くだ）していいんだな！？」
「どうぞ！　霧のトップはキミだよっ」

二十年程前に入り浸っていた時の、抜け道を思い出す。
「じゃねっ！」
朝輝は廊下に走り出た。
「あ、朝輝ねーさん！？」
「ティガくんに聞いて！」
困惑する竜貴とすれ違い、夕霧総本部の廊下を走る。
「聞いてた！？　ディックっ」
『完全に聞こえていました』
「ゆーさん……レイ・ダロウには、……ソロモンくんから行くよね。たっけーに両方のネットと猫印（プシ・キャット）のセキュリティ強化、ってお願い。あと、遮夢とガンのジュニアそっちに居るよね？　少なくともこーくんの声は」
電波が途切れないように、走る。
『……了解しました。他には』
「あとは軍の指示を待って。何かあればキミの判断に任せるよ」
『ありがとうございます』
「Ｂｏｎｎｅ　ｃｈａｎｃｅ！！」
通信を切った彼女の手。
取り出したカードが鋭く黒光りする。
周囲を構成する物質が変わる間に、朝輝はアドレスを見つけた。
「あ、ロキ！？　私。……そう。霧から皇帝に。それと、リル（わたし）から

飄雅(あなた)に」

もうすぐ、軍からも回る筈だよ……

「どうした？　急にシゴト口調に戻して」

電話を切った隼斗に、匡征が尋ねた。

「匡征、それと、喜べよエドワード。飄雅が動く」

「っ！？　なぜだ！！」

隼斗の言葉に真澄が叫び、匡征がまさか、と呟いた。

「河川派が、……いや、河川公の一将が接触してきた」

ひゅっと息をつめた真澄が飛び出した。

匡征は拓夢に連絡を入れる。

「中将？　リチャードですが。……ええ、ゼンのことです。飄雅を、」

「納戦(おさめいくさ)になるんかな、それとも、」

孝文の目が輝く。

「使っていいそうですよ」
「戦初(いくさぞめ)に、なるんかな」

二人の色に、真由美の背筋が凍った。

xxxii（前書き）

開戦！？　と匂わせて
からの、
肩透かし。

年越しです。猛暑の中で打ち込みましたが、書いたのは昨年１１月１７～２２日です。

嗚呼、死にそうな程の疲れ。目にも肩にも腰にも。

xxxii

「何もなかったなー」
「地球分類のとこはな。軍は走りまわっとったけど」
「でもよー、こやって見やったらなんか……『平和』やなー」
「何やそりゃ」

真由美と孝文は並んで最後の月を眺めていた。

「なんか全く実感ないし」
「でも中嶋とか怪我しとったし、暦ちゃんやろ、その旦那やろ、ネイやろ。そーいえば橋本も。平和(へーわ)なんはまゆだけやで」

なんで!?　と真由美は抗議した。
なんでもや、と孝文が返す。
夜でも澄み切っていないと分かる汚い都会の空。
それでも、その天井に星を頂けばまた違った象徴となる。

「まあ今回、一番動いたんはレイディやろけどな」
「朝輝さん!?　たか知り合い!?」
「きみるあエルリル、紋章描き三人衆。人格は四つやけどな」
「……ごめん全く分からん」

はあ、と大袈裟にため息をついて、孝文は説明を始めた。
「笠凪の岐臣(きみ)瑠亜(るあ)と、僕の師匠のエリオットさん。で、レイディや。この三人というか四人で紋章の研究しとるんや。こゆやつ」

ポケットから取り出したメタルグリーンの携帯。

ちゃらららっちゃら～、と自前の効果音で、携帯の中から引っ張り出す。
緑味ではあるが、ほとんど漆黒と見える『カード』。

「これってカード！？　うわ、近くで見るの初めて！」
「そーなん？　ぼくのはエリオットさんにもろてんけど。一つ二、三十万するらしー」
「に、さんじゅう……」
「で、このマーク。これは魔法の塊やっちゅー証（あかし）や。コイツは一定の箇所に十回移動できんねん」

緑色の光を放つ繊細なラインが、複雑で流麗な紋様を描いている。
ちなみに、カード一枚で通常２８～３２万円。
一応極秘とされているが、販売元のＰｕｓｓｙ　Ｃａｔでは種類によって１８万円から売っている。
それに効果（プログラム）を付加するのに、簡単なもので五万円。
魔力（充電）添付するのには、量と質にもよるが１２万円から。
孝文が持っているのを流通している値段で考えると、１００万円は下らない。

「で、こーゆーのをもっとええのに改良するとか、新しいの見つけるとか、そーゆー研究しとんのや、エリオットさんらは」
「たか……」
「なんや」
「……一番高価（たか）いカードって何……？」

何を聞くんや、という孝文は、それでも一瞬考え、真由美に解を与える。

「レイディのやろな」

「……なんで？」
「そら、四天王全員の能力詰め込んどるんやから。飄雅のも。しかも魔力自前やから、半永久的に何度でも使えるという……」
「……して、お値段は？」
「……天文学的数字になるで、数字の限界にちょーせん！
や」

まあ、あんだけ使いこなせるんは十人おらんやろけどな。
真由美は考える。
この、自分の価値は？

「あ、」
「ぉお！！」

花火が上がった。
夜空の中央に、朱い大輪の、菊。

「おめでとー！！」
「あぁ、また喧騒の一年が……」

「まゆ――！　たかちゃん来とらん！？　留学期間終わったのにアメリカ戻ってないんやと――っ！！」

「ここにおるで、花火見とんねん」
「ちょっ、まゆ――――っ！！」

真由美の母の声。

今年も騒がしくなるに違いない。

xxxii（後書き）

『四天王』
リューシン・アルジェディ
アレン・クルースト、榊原夏羽（さかきはらなつは）
セレム・ロレイン、夏目聖夜（なつめせいや）（フェアフィールド）
ルディ・エストリア（ダーククラウン）
ハイゼット・ヴィン
以上が四天王&五人目です。
登録順に。夏羽は故人。
……何かに気付いていただければ嬉しいです。

xxxiii（前書き）

新年早々暴言ですみません……。

話の中のことですが。

xxxiii

『キモい！　来んなよストーカーっ！！　とっとと失せろ！』

なぜか人の居ない、一月終わりの日曜の朝。
真由美がノートを買いに購買へと歩く、渡り廊下の下が、なんとなく騒がしい。
若い男、というよりも、少年の声が響いてきた。
ほぼ無人の、とはいえ、職員棟から。

『だーかーらっ！　俺は朝輝のために来たんだ！！　っでなきゃ誰がこんなとこ来るかよっ！！』

外階段の１１階地点で、真由美の耳に一組の足音が聞こえてきた。
少し見ていると、帽子を被っているらしい細身がひょいと躍り出てきた。
足音は彼のものではない。
彼は二階から飛び降りると後ろを確認し、つっかけているだけの履物に注意を向けた。
とんとんとん、とつま先で地面を蹴ると、帰りの体制に入る。

その間、真由美は１０階と１１階の間の踊り場で見物していた。
のだが、

『くそッ』
「え？」

「追っ手」、足音の主が姿を現した。
焦った彼は走り出すより、まず飛び乗った。

外階段の、……真由美の一階上に。

『サラ――――っ！！』

当たり前ながら、普通、１２階相当の高さまで生身で跳び上がるのは不可能だ。
助走なし、音すら立てずに跳び乗ることも普通、無理。
よって追っ手がとった行動は、その場から呼びかけること、だった。

『キモい、死ね。つーかアトカタなく消えうせろ！！』

土に返るな、と叫んだ彼はさすがに疲れたのか、手摺に座った。
真由美は一つ、違和感を感じた。

『っ、降りて来い！！』

（サラって――男でしょ？）

真由美の頭の中に、『サラ』という愛称に該当する男性名はない。
ただそれだけ。
別に、正しい『愛称』で呼ばなければならない法があるわけでもない。
のだが、

（……なんか、心こもってない？）

『この世に存在した痕跡を残すな！！』

両者共に。
その内に諦めたのだろう。

どこか見覚えのある、追って来た男は建物の中に消えた。

（……なんだったんだろう）

ある意味、恐ろしい考えに至った真由美は頭を振る。
いつの間にか落としてしまっていたらしい財布を拾い、気を取り直して立ち上がった、正面。
モロに「目の前」に、

『で、』

あったのは、人の顔。

『誰？』
「っきゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁ、……っ！？」

しかも、サカサマ。

『……折角の休日なのに、朝から騒ぐなよ。口で塞ぐぜ？』

その上、自分のことを棚に上げてサラリと言い放った。
なぜだろう、真由美は精神的にダメージを負う。
そいつ（真由美の中で「彼」から降格した）は、真由美の口から手を離すと、まず上下にくるりと回った。
そして手摺を乗り越える。
これで、二人は普通に外階段の踊り場に立っていることになる。

『で？　誰なの』
「え、えと……片岡真由美と申しますが」
『どっかで聞いた気がしないでもないけど、ま、いっか』

そいつは興味を失ったように、足元に視線を落とす。

（スリッパ……）

櫻樹のだ、よく見ると。

真澄だったらまず自分が名乗れ、と時代錯誤なことを言っていただろうなと考えながら、真由美は階段を下りるのを再開した。

矢先の、１０階との接合部で。

『サラは！？』

「え、、」

ばったりと。

『っあんだよちくしょ――――っ！！！』

xxxiii（後書き）

嗚呼、疲れた……。

xxxiv

『誰！？　サラをっ』
「え、いえ違いますなんか分からんけど違います！！」

驚きで、思わずお国訛りが出る真由美に、どこかで見覚えのある誰かは詰め寄った。

『何が違うんだ！』
「何がって」
『～加減にっ、しやがれ！！』

掴もうとした手はバシリと払われた。
次の瞬間、

「って、ぃやあああああ、っ！？」
『だーかーらー、叫ぶなって！』

空中浮遊。
と言うより、跳躍していた。

『…あ、スリッパ……』

濃い焦げ茶色。
金の櫻樹マークの入った物体が二つ、遠退いていった。
重力だけではありえない速さで遠ざかっていくのは多分、自身が重力に逆らっているからだ。
フェンスの上端を掴む。
屋上。

大車輪のように一周した。
階段へのドアを蹴破ると、そいつは中へと飛び込んだ。
真由美を抱いたまま。
「な、なんで上に跳ぶんですか！！」
ありえない動きに、酔わなかったのは奇跡に近い。
『猫は高い所が好きなんだよッ』
理解できない。
さっきからずっと、日本語と通用語による会話が成されている。
二階分ほど階段を内階段を下りたところで、足音が聞こえてきた。
『ちっ、どっか内から鍵のかかる所は！？』
「そこ曲がって左っ、三つ目の扉が、確か……っ」
現代美術資料室。
先月、孝文の入り浸っていた部屋だ。
『その開いてるやつ！？』
「はいっっって、ええ！？」
常人ではありえない速度で走る、と言うか跳んでいるそいつは止まらず中を確認し、
――蹴った。
壁を。
「う、ウソっ」
『口閉じろ！』

そいつは背中から部屋に飛び込んだ。
片足で着地すると、軽く膝を曲げて鋭く半回転、勢いを殺す。
曲げた膝を伸ばして扉へ跳び、扉を締める。
真由美を抱えたままで。
ガチリ、と鍵のかかる音がした。

『……おーい、大丈夫かー……』
「きっ、気持ち悪――……」

ジェットコースターは速い。
ヘアピンカーブも連続するかもしれない。
だが、地面に対して垂直運動はしないし、急に後に下がることもないし、その場で素早く回転（上下にも左右にも）することもない。
そして、進行方向と何より安全が（かなりの線で）保障されている。
そのはずだ。

『あー、『イズ酔い』したか。まあ仕方ない。しばらく潰れとけば治る』
「……、ぅ〜〜〜〜」

床に座り込んだ真由美の髪を撫でて、あは、ナンジャクモノメがー、とそいつは笑った。
口調からして、誰かのモノマネらしい。
どうにか落ち着いてきた真由美は、横に座ったそいつを見て不思議なことを見つけた。

「……寒くないんですか」

長袖、長ズボンのくせに、露出度が高い。

それも、かなり。
今現在、一月の終わり。
上半身肌、出まくり。
『寒いって何。朝輝にキスした時の親父の目のこと？』
「……」
寒いという概念が無いようだ。
冷たいというのはあるらしいが。
「それ何ですか？」
広い袖の中から、幅広の定規と同じくらいの物体が覗いていた。
『ああこれ？　スカウタ、……マジかよ！！』
いつの間にか、後に足音。
『ここドア二つあんのかよっ』
そいつはさっと真由美を持ち上げた。
「え、ウソ！？」
さて、第二ラウンド、開始。

xxxiv（後書き）

若いなー、元気だなー……。

xxxv（前書き）

約１０時間遅れ……。

xxxv

「なんで私持っていくんですかっ」
『お前アイツから言い逃れられると思うのか！？　って、うわ！』

ばくっ、と手が握りこまれ、帽子が消える。
ポニーテールにされた長い髪が現れた。
しかし、

「なっ、なんで水色！？」
『さーなっ、親に聞いてくれ！』
「しかもなんでシュシュ！？」
『っ、朝輝に聞け――っ！　ヨユウそうだなっ、速度上げるぞ！？』

水玉模様の。

「ちょっ、やめてっ！！」
『捕まりたいのか！？』

僅かに前傾姿勢。
コイツは最早ヒトではない。
戦闘機だ。
怖すぎて絶叫できない。
９０度、廊下を曲がるのにも軸足などない。
壁を蹴る、それのみだ。
ちなみに裸足。
真由美には、生物学的にソレが人間（ウィード）であるかないかを考える余裕はない。

角を曲がると、向こうの方に別の人影があった。

『リチャード！！』

『……ロシア！？』

二人はお互い呼びかけあい、

『動くなっ！　パス！！』

ヒトでないほうが不吉な音を出し、

「ぱ、ぱすって……やめてっ！！！」

真由美はとんだ。

空中を数メートル。

投げられて。

『ロシア！　イズ！！　どういうことだ！！』

あの速度からすると不思議だが、真由美はとりあえずふわりと抱きとめられた。

『ちょ――っと、まてっ！』

前に出した足を軸に素早く向き直り、踏み切る。

あの勢いをそのままに、固めた拳がキレイに入った。

追っ手の、鳩尾に。

『ロシア！？　お前何を……』

人が倒れる。
声もなく。
倒れて、動かない。

『……かんつーはしてない。いちお、手加減はしたつもり……』
『つもりじゃ駄目なんだっ、関係者とは言っても部外者相手に……』

ぶつぶつ言う声を聞いていると、内容に関わらず現実に帰った気がした。
さっきまでのは一体、何だったのだろう。

「……あ、じめんだ……じめんがある……」
「大丈夫か？　……大丈夫な訳ないよな。安心しな、もう跳びも走りもしないから」

聞こえてきた覚えのある日本語に安堵する。
ぽんぽんと子供にするように背中を叩かれて、真由美は顔を上げた。

「な、中嶋くん……」
「どうした」
「……いえ、なんでもございませ、ん……」

へらりと笑って離れた体が回る。
支えた腕が、そのまま真由美を座らせた。
持っていたコーラを額に当てられる。

「無理するな。イズ酔いだろ」
『俺とーとーソニックじーさん超えた！？』

元凶が叫んだ。

テンションが高い。
一生黙ればいいのに、と真由美は思った。
「煩いぞ。せっかく日曜なのに」
考えることは皆同じらしい。
そいつは袖から一枚のカードを取り出した。
孝文のより濃い、青味の黒。
「帰るのか」
隼斗の声は完全に、早く帰れと言っている。
『さらばっ！！　……とやりたいとこなんだけど、』
そいつは隼斗に手を差し出した。
『貸して？　節約中なの』
「……誰が貸すかっ、尾上に言え！　というか、歩いて帰れ！！」
ソニックじーさんもジュニアもさっき霧に居たんだけど。
しかも歩けって、地球の外へ！？　と、そいつはまた騒ぎ始めた。
直後に、パラリと。
「あれ」
濃灰色の、カードが降ってきた。
「会長のか？」

水色の着る薄い服の、どこかから。

『……ラッキー☆』

「……おい」

拝借する気らしい。

が、

『じゃあなっ！！　……って、あれ？』

「よかったな、軍部の認証だけのカードで。下手に飄雅とかＢｌｕｅの審判断罪つきじゃなくて」

一向に、効果が顕れない。

個人認証とロックが掛かっているようだ。

『……ああ！　これ持ってたから鬼ごっこになったのか』

水色の生物は、ぽんと手を打った。

そいつにとって、今までのは遊びに分類できる程度らしい。

真由美は溜息をついた。

「……購買か？」

「え？　あ、うん」

『え、リチャード俺見捨てる気！？』

隼斗は見事に無視して、真由美を購買まで送って行った。

（そういえば、大丈夫なんだろうか……）

真由美は、未だに廊下に横たわっているであろう人物のことを思

った。

xxxv（後書き）

追いかけっこ編（？）、終りです。
嗚呼、やっと……（精神的疲れ

xxxvi（前書き）

時間とびましたが、やっと教室に戻ってきました。
最近、頭の中でこの二人をセットで扱っている気が……。

xxxvi

ひと雨ごとに春の陽気は増していくが、まだまだ寒い日の続く、三月。

「うっわークツジョク！！　りゅーきくんに負けるなんてっ！」
「何だと片岡！　それじゃ俺が勉強からっきしできないみたいじゃないかっ」

１Ｊの名物二人が平和に騒いでいた。

「スミー！　どーしよ私二年生になれないかも！！」
「ひどっ、それ何気に酷いから！！」

「大丈夫だろ」

匡征が言った。
一応、Ｊクラスメンバーは違いこそあれど全員奨学生だ。
成績で留年した者は開校以来、未だ一人も居ない。

「こーくんに言われたって嫌味にしか思えないっ」
「そーだこーくんガリ勉のくせに！！」

事実に基づく言動も、騒ぐ彼らの気休めにさえならないらしい。
匡征は思わぬ反撃を食らった。

「ねー愛洲くん、こーくんに何か言ったげて！」
「なんで俺？」

そしてなぜだか「たっくん」と呼ばれない拓夢が巻き込まれる。
「「あんまり勉強してなさそうだから」」
「「……」」
真由美と竜貴がハモった。
拓夢と匡征の沈黙は、ハモった、という表現で表しても良いのだろうか。
それでも今年度中ずっと一位だった奴だぞ、と匡征は言わなかった。
言って御不興を買いたくなかったからだ。
そしてそれは悲しいことに、非常に正しい判断なのだった。
難しい顔をする匡征の横で、拓夢が俺って努力してないと思われてる？　と悩んでいた。

「愛洲くん勉強教えてよー」
「目崎に聞いた方が早くないか？」
しかし表面は通常を保つ。
非常に複雑な環境で育って出来上がるのは、非常に複雑にキれた人間か、常に複雑で完璧な人外だろう。
「スミ最近付き合い悪いんだもん！」
「もんじゃないだろ、もんじゃ」
「もんじゃ焼きって美味いのか？　俺食ったことねー」
気楽である。
物凄く、有り得ないほどに。
学年末試験の終わった三月の初め。
一番気楽な時期かもしれない。

「きみたちきみたち。勉強するなら図書館行きなさいよー。八時までには出てね。最後の人は鍵もよろしく」

「了解隊長――！」

「先生、私二年生になれますか！？」

前の扉から、暦が顔を覗かせた。

「大丈夫よ。今のところ一番危ないのは橋本くんね」

「「ええ！？」」

たまにキれるのと目つきは悪いが、成績良いのに提出物出すのに授業態度良いのに、と真由美と竜貴が驚く。

「あ、進級のことじゃないわよ？　もちろん」

『暦ＳＭＩＬＥ』ではない、不思議（フキツ）な笑みが暦の顔を支配していた。

（こ、こーくん何したの一体！？）

（暦ちゃんに目ぇ付けられるってどゆこと！？）

ちなみに、二人が匡征に詰め寄った声はばっちり暦のところまで届いている。

「一応、彼の名誉のために言っておくけど、別に悪いことしたわけじゃないからね？　今後の行動にもよるけど。……おっと、もう五時。会議行ってくるから、鍵ちゃんと掛けてねー」

「りょーかーーい」

真由美はじっと真澄を見た。
真澄はじっと画面を見ている。
というより、睨んでいる。
かれこれ一時間、シルバーグレイのパソコンの前だ。

「……浮気しよ」
「片岡こっち来いよ」
「えーヤダ」

竜貴は振られた。
きっぱりさっぱりすっきりと。
真由美は何らかの違和感を感じ取ったのだろう。
真由美から見て一番人畜無害そうなところに収まった。

「なんだよ、いーじゃんかっ」
「えーだってりゅーきくん愛人だもん」
「愛人？」
「……なんなんだそれは」

真由美のために椅子を半分空けた拓夢が復唱する。
匡征が不審げに聞いた。
真由美の思考は時に大きく跳躍する。

「こーくんも入れたげよっか？　私とスミがふーふで、ななみが友達。愛洲くんがスミの愛人」
「入ったっけ？」
「ななみが入れた」

またアイツ余計なことを、と拓夢が零した。

無論、心の中だけで。
脇村七海はとある分野で拓夢と共鳴するらしい。

「結構。俺一応彼女いるし」
「ウソ！！」
「マジで！？」

失礼な奴らだ。
匡征は不遇の星の元に生まれてしまったらしい。

「明矢歌嬢（あやか）か？」
「誰！？　愛洲くん浮気！？」
「俺じゃない」

真由美は同じ椅子に座った拓夢に言ってみた。
理由は、暇だから。
そして、面白そうだから。

「……そう」
「……前途多難だな。だから暦が」

「まゆ、」

いつの間にか居なくなっていた真澄が戻ってきた。
どうやら電話を掛けていたようだ。

「オーロラ血族の会合がある。今なら潜り込めるが……行くか？」
「行く！！」

拓夢も振られた。

しかし彼には実際、物凄い彼女がいたり、する。
可哀想なのは、それを気付かせないが故に可能性に賭ける、片思いのとある少女だ。

じゃあ現場で会えるかもな、と拓夢は言った。

ｘｘｘｖｉ（後書き）

やっと戻ったと思ったら。
また出て行きます。

オーロラ血族というのは、
……お偉いさんってことで。
比較的、地球人に知られていて、かつ地球人的に肯定されている貴族（？）みたいな。

xxxvii（前書き）

遅れました。
大幅に。
嗚呼あぁぁ……

xxxviii

「パンツスーツって初めて！　スミはなんで男装？　いつものことだけど」
「静かに、目を付けられたくないんだ」

潜入中。
城のような門から玄関へと続く道。
二人は多数の人に混じって歩いている。
ちなみに、ここは地球上ではないらしい。

「エドワード」

後ろから声がした。
誰も振り返らない。

「先輩、どうでしたか？」

振り返らないまま、真澄が聞いた。

「一番近い席をとったが、続きや前後ではないぞ」
「時期が遅かったので、それくらいは加味しています。大丈夫です」
「そうか。上手く紛れな」

二人のポケットに、それぞれ封筒が滑り込む。

「ありがとうございます。助かった。……ところでカイリは見ませんでしたか？」
「あれはロードの跡継ぎだ。正式の客として主座で固められている

だろう」
「……そう配したのでは？」
今日最後の日本語だろう。
真由美はこれからに思いを馳せる。
「ああ。今日はほとんど動けない」
『少佐ッ』
二人の後ろから金茶の髪の、軍服の男がすり抜けて行った。
多分、彼が真澄の『先輩』で『少佐』なのだろうと、真由美は見当付けた。
『どうした』
『は、アルファスの頭首が』
『来たか。飛軍の、解っているな、ダロウ中将に手を出させるな。王妹（キャシュア）もだ。霧と特技部（特殊技能部隊）巻き込んでドンパチ始めるぞ』
彼らは陸軍所属のようだ。
この礎（軍部）の陸軍は、地面のあるところ全てを担うという。
数ある戦闘集団の中で最も統制がとれ、かつ最も業務領域（戦闘場所・ハバ）が広いと有名。
一騎当千の強者揃いの飛軍と、確実かつ絶対と言われる水軍。
世界一の解析班や『特殊』と言うも生温い能力者たち、異常に優秀な医療班と、独自のネットワークを含む特殊技能部隊。
人数では『君臨』や『８７』、『エレヴィア』に劣るが、軍としては最高点に在る『礎』。
それをこの３０年程、実質束ねているのが軍師様ことドギャルダ・バート現総帥。

後成王をも兼任している。
　真由美は事前に仕入れた情報を反芻する。
総帥自身も『シールド』と呼ばれる能力の使い手らしい。

「これが招待状？　これで入れるの？」
「ああ。多分末席だろうから、座席チケットと同じようなものだろ」

視界に不思議な、映るはずのない色が浮かぶ。
　近代的な建物だが、なぜか城のイメージがしっくりくる。
歩いて行くと、高級ホテルのような広く明るい玄関に着く。
臨時に増やしたにしては豪華な受付台の一角に、見覚えのある赤毛。

「スミ、あれって」
「坂谷御曹司か。そこまで行くか？」
「うん。行ける？」

　それには答えず、真澄は先々歩いて行った。

『やーやー真由美ちゃんお久しぶり。そしてエディ、ようこそ闘争の喧騒に。招待状お見せいただけますか？』
『お久しぶりですー』
『……いきなりで悪いが、これはどういう……』

　礼音は封筒を開け、確認にかかった。

『本日の目玉はアルファス兄弟喧嘩でありますな。……ところで』

　真澄に封筒を返し、もう一つの方ピラピラと振る。

『こっち、名前無いぜ？　しかも一番後ろ。近い席を選んだんだろ

うけど』

礼音は一瞬眉を顰め、徐に懐に手を突っ込んだ。

『真由美ちゃん、偽名をどうぞ』

『え、えと、ターニャです』

聞かれて咄嗟に出てきたのは、先週暦の授業で扱った小説の主人公だった。

『了解。タチアナ・ヴァロフって書いたよ。席は底辺の南側二番目、前からも二番目の席』

『え！？』

『交代。俺ほとんど戻れないし、他にも居れる席あるから。角の方だからエディの所へそう時間も掛からないはず』

彼は真由美に封筒を差し出した。

『次の客来たから、早く』

『あ、ありがとうございます！』

それを受け取って、真由美は真澄と会場に向かう。

「お、オレンジ頭！！」

「……染めてるんだ。あの人は日本語ばっちり聞き取ったと思うぞ」
「あ、あの人キャシュア！？」
「……彼女は半分以上日本人だ。声を下げろ」
「おお！　銀髪超美女！！」
「男だ、妻子持ちの！　声落としてくれっ、頼むから」

渦中の王妹（キャシュア）とその夫、ゲイシッド当主の三人組み。
血族の飛軍（ヒコーキ）三人組と呼ばれる彼らは皆、日本語が堪能だ。

xxxviii（前書き）

今までの説明が足りなかった、気が、物凄く……
一段落したら改訂版でやり直そうかな……。

xxxviiii

（……こわ）

隣が。

真由美は礼音に譲ってもらった席で開始を待っていた。

（確かにっ、物凄くいい席ではあるんだけど）

パッと見て、周りはほとんど関係者。

制服や軍服を着ていたり、写真や何かで見たことがあったり、見た目からして『偉い人』だったり、する。

それにしても、

（……この人どっかで見たことあるような……）

中途半端な長さの、明度の高い銀色の髪を後ろで一つ二束ねている。

纏めてもはねる強情な毛先が、資料のページを繰る度に僅かに揺れる。

（美形なのに怖い……この人オーラ強いなー）

会場はほぼ台形に席が並べられている。

真由美は下底の左側に座っている。

生成王（キャミュラ）が座るのは、短い上底あたりなのだろう。

「片岡！？」

「中嶋く、……コスプレ？」

「……悪いが一応準正装だ」

後ろから隼斗が声をかけた。

真由美が思わず声に乗せたのは、彼が軍服を着ていたからだ。

「なんでここに？　しかも礼音が駆けずり回って手に入れた席に」

「譲ってもらったんです。この席には居ないからって」

「……上席（司令部）に居座るつもりか」

苦い顔をする隼斗に、前方から声がかかる。

「知人か」

「はい、学友です」

（声かっこい――っ）

ならば大丈夫か、と彼は振り向くことなく資料を見ている。

ほんの少し離れれば、誰も彼が会話に参加したとは思わないだろう。

『なぜです？　私は師族血族（クロスアウィード）ですが』

開始が目前に迫る頃。

凛とした女の声が耳に飛び込んできた。

周囲がいきなり静まる。

『ではあなたは人間（ウィード）以外の種族と血縁を持つ者や、彼らを婚姻関係に持つものを全員排除する方針ですか』

ふわりとした中に、強いシンを感じさせる声。

姿が見えなくても分かるこの声は、朝輝のものだ。
『では、貴族のほとんどは今回、欠席ですか。王族、師族は全員出られませんね』
主座のあたりから一人の男が一直線に、しかし悠然と歩いてくる。
さっきまでは全く感じなかった（居ると知らなかった）存在に、直線上の者は道を開ける。
『僕の血族は人間とは子を宿せない。その上、純血を重んじる家系ですから、人間の血は過去数万年、一滴も入っていません。そうすると、僕があなたの言う人間だけの会合に出席するのはおかしいことですね。ジェイン、行こう』
高い天井へとのびる窓。
陽の光が溶け込んだかのような金の髪が輝く。
神々しいとまで言得る容姿に、唯一影を落とすサングラス。
『どういうことですかマレステリマリアル！！』
『どうも何も……、僕は人外（ダーク）ですから』
美人かつ地位の高い（であろう）人の敬語は怖い。
サングラス越しとはいえ、ね？　と同意を求めるその笑みも。
これらは全て計画的な芝居であったのだろうか。
『ご着席いただけますか？　まもなく開始ですので。ルディ・レ・マレステリマリアル、ジル・ディ・クロスアウィード』
少し白髪の混じる、茶髪の壮齢の男が言った。

『そうですね』
『そうしましょうか』

（ありがとう。助かったよレイグ）
（さんくす姉の旦那、御大将！）
（……あまり派手に吹っかけるんじゃない）

呆気にとられる下部をおいて、役者はそれぞれの持ち場へと向かう。

（リル、）

一瞬。
真由美の隣の男が目を上げた。
一瞬。
朝輝が目を向けた。
一瞬。
ばちばちばちっ、と目に見えるような情報が、飛ぶ。
一瞬。
真由美には、見えた。

（すっごい……かっこい――……）

一瞬、芝居の打ち合わせ。
後は皆、演じきるのみ。

xxxviii（後書き）

真由美サン、本当に飄雅衆好きなんですか？
いえ、本当に好きなのは熱狂的ファンの彼女の妹です。
でなければ気付かないはずが……

xxxix

休憩時間。

「誰も居ない、よね」

流石というかなんと言うか、専門用語はどんどん出るし、覚えておかなければならない人の地位や肩書きも半端な量ではない。
情勢はころころ変わる。
その発言を聞くのはかなり良い勉強になる。

「さて」

広い洗面。
明るい照明の下で、真由美は自分と目を合わせた。
焦げ茶の髪、黒の瞳。
普通の日本人だった。

（痛みが限界、ですので）

それが異常だと、知るまでは。
わずかに暗く色づいた、亀裂の入ったコンタクト。
割れるはずのないそれに傷が入る、それの限界値を超えた負荷。
鏡の中から、焦げ茶の髪の焦げ茶の瞳の日本人が覗き込んでいた。
茶色味がかった、クリーム色。

「私は、……私」

笑いかけると、笑い返した。

ぎこちない、哀れみを含んだ笑み。
高校、田舎から都会に出ると、かなり辛くはなった。
邪魔なもの。
でも、使い道はないのか？
鏡の中の自分に、突然。

「つ、……つの！？」

驚いて振り返る。
と、そこで会ったのはイタズラな二つの瞳。

「あ、朝輝さん！？」
「はーい朝輝です♪　お久し振りー」

ん？　と朝輝は真由美の頬を捕まえ、瞳を覗き込んだ。

「そーかぁ。そうだよね……」

勝手に納得してつぶやく朝輝。
不審げな真由美を抱き込む。

「あ、あさきさんっ！？」
「大丈夫、大丈夫だから、ね」

何なのかは解らない。
しかし、何かが溶け出した。
そんな気がした。

『朝輝ー？』

扉が開いた。
ここは一般客に開放された控え室の一つ。
で、たまたま性別関係なく誰でも入れる場所。

『……お前何をやっているんだ。心の狭いクラウン次男なんかに見つかったら爆殺されるぞ、その子が』
「大丈夫だよ、そんなことさせない。……落ち着いた？」
「あ、はい……」

じゃあもう大丈夫だね、と朝輝が真由美の手を引っ張った。

「あの、朝輝さん」
「なんでしょう？」

朝輝はいつものにこにことした表情に戻っている。

「あの人、後成王……？」
「次期、だ」

部屋の一歩外から返事が返ってきた。
黄緑色の目に、赤味がかった長い金髪。
見上げる長身。

「ほんとに自覚あるのー？　あ、これは地毛だよ。ゆーさんにオレンジ頭って言ったんだって？　ラルドが笑いに笑って」

殴られてた、と。
まとめて後ろへと流した髪を引っ張りながら言った。
引っ張られた方は加害者の髪に手を突っ込み、かきまわした。

「こっ、子供扱いしないでください私の方が年上なんだからっ！」
「精神的にどう見たってお前の方が下だ」
「あ、朝輝さん年上なんですか！？」

この人は一体何歳なのだろうか。
かなり謎だ。

「年上だよかなり。……前にもこんな会話したよね」
「二十年程前にな」
「去年もシーズン中ずっとやってたような記憶が、ごめんなさい。
嗚呼、ジョゼのあの純粋可憐な美しさは一体いずこへ……」

朝輝は悲しいぞ息子よ、と朝輝は次期後成王に抱きついた。
何気に鳩尾に頭突きをかまそうとしているあたり、朝輝らしいと言えば言えなくもない。
されたほうも慣れているのかお咎めなしで、手で止め乱した髪を梳く。

「お、やこなんですか……」
「血縁はない。名付け親、名づけ子というだけだ」

あの時は可愛かったのになー、と朝輝はつぶやいた。
目つきは悪かったけど。
かなり。

xxxix（後書き）

今更ですが、「朝輝」は「アサテル」ではなく「アサキ」です。

ちなみに次期後成王の名前はマキシム・テイラー。

xxxx（前書き）

開きました。
ごめんなさい。
しかも次回と内容変わらないです↑

ｘｘｘｘ

［スミへ。相変わらず隣が怖いです。ｂｙゆ］

暇だ。
真由美には理解の及ばない会議になってしまっているので、もう聞き取れる気がしない。
暇つぶしに真澄に電波を送ろうと試みたのだが、届いた気配もない。
みどり。
色の洪水。
交じり合って主張しあって、統一性もなく、美しくない。
ところでさっきから、なぜか控え室のほうが騒がしいようだ。

『私の意見は聞く必要ないと？』

たぶん、終わりに近づいて。
玄関のほうから、違和感の塊。

『以前言いましたね』

要度の高い、白濁した茶色。
それが邪魔で、歩いてきたのであろう人物が見えない。

『通らない場合は』

すっと、周囲が冷えていった。
色は中央にある。
燃え上がるような、要度を持つ、それが。

『実力行使のみ、と』

燃え上がる。
炎として。
白濁した茶色。
火の色ではない。
襲いかかる。
自分に。

（なに、……嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だっ！！）

目を閉じていても、見える。
白く濁った色が。
真由美は知らない。

『はっ、そんなことなど聞いていない』

隣の男が立ち上がったことも。

『あ、アウィード卿……っ』
『ジュネ様！？』

バッと一瞬で、強靭なシールドが席との境に構築されたことも。
眼帯の男と彼に似た若い女が両手を広げたことも。

『動くなよ優！』
『見てなよミコ！！』

二人の知人がシールドを越えたことも、彼らから発せられた水分が劫火を相殺していることも。

『マキシムくん、行ける！？』

風の女が灰をかき集めたことも。

『任せろ。……誰も寄るなよ！？』

父の遺志を継ぐ男が中央に飛び込んだことも。

『何をしたのか、解っているんだろうね』

ずらしたサングラスの下から現れた美しい緑色の眼が、不吉な視線を送り出したことも。

『――――――っ』

中央の男が弾け飛んだことも。
それが唯の傀儡でしかなかったことも。
一連の騒動の根源が自身だということも。

気付けない。
真由美に知れた存在は、後ろの体温と、不思議な声と、対角線上にある、一対の瞳。

目を開く。
彼女の目に、人間など映っていない。

中央で。
銀色の光が、全てを暴き出す。
ブワリと浮かび上がったのは、男の姿。

真由美の正面に。
『お見事だな、ドレイル。仕方ないからこの子だけでも貰っていくよ』
しかし、なぜ？
男は真由美に手をのばす。
だが、
『行かせると思うか。この、俺が……ッ！！』
なぜ？
真由美は後ろから抱き込まれる。
『頼んだよ、蹴りこんで！』
『解っているっ』
中央から客席へ。
消えた隼斗と入れ替わるように現れたのは陸軍中将二人の片割れ、ロキ・ドレイル。
真由美を抱えたまま、飛んで軍靴で頭部を強く蹴る。
開いた掌から光の刃が発せられ、相手の身体の力が抜けかける。
それを文字通りシールドの中へと蹴り込んで、
『リチャード！』
真由美は再び飛んだ。
また、投げられて。

xxxx（後書き）

陸軍中将のもう一人はもちろん（？）、ネイ（ここではディロウ）です。

xxxxi

膨れ上がった炎が、要度を増した色と共に、襲い掛かる。

（なに、……嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だっ！！）

（大丈夫。恐がらないで）

控室の喧騒は別の種類のものになっていた。

（朝輝や、……魔夜にリューシン、セシルにも会っているのに、）

白濁した、汚い色の、要度が下がる。

（まだ、慣れない？　珍しい強さではない。ただ、汚いだけだ）

肩に置かれた低い温度が、体温を下げていく。

右肩にあった大きな手が、閉じた瞼に移動する。

サラリと髪が首筋に触れた。

「目を開いて、お嬢さん」

艶やかな低い声が体に染み込む。

「世界はこんなにも、美しい……」

異形の中に在って輝きを放つ、異質な存在。

畏怖の対象、世を切り拓いてゆく者。

変化を求め、変化させることに意味を見出す。

［世界は、彼が廻している］

漠然とした、どこかからの声。
そっと、目を開いた。
混沌とした世界。
それに変わりはない。
それでも。

「綺麗……？」

混在する色の湖。
全く音の存在しないうみ。
自分の声すらも、吸い込まれていく。

［そりゃあ俺の創った世界、だからな］

男声とも女声ともつかない声が響いた。

（なんで、気付かなかったんだろう）

目があった。
冷たいような暖かいような、灰色。
しかし、澄み切った瞳。
天から一条の、銀色の光が降りてきた。
それは、審判か。

「っ、え！？」

『お見事だな、ドレイル。仕方ないからこの子だけでも貰っていくよ』

『行かせると思うか』

あの色が、目の前にあった。

『この、俺が……ッ！！』

後ろ、隼斗が居た辺りから抱き込まれた。

『頼んだよ、蹴りこんで！』

『解っているっ』

目の前で握り込まれる、掌。

跳び上がり膝で頭を蹴る。

シールドの中へと押しやるために開いた掌から、光の刃。

力の抜けかけた体を、本当に蹴り込んだ。

『リチャード！』

（な、……嘘！？）

前回よりは安定して、しかし投げられていい気はしない。

「よ、っと。確保」

『これね、鍵。歩いて』

『了解』

朝輝との会話を聞きながらも、意識は遠退いていく。

「も、むり……」

「ああ、眠っとけ。お前本当に災難だよな」

２ヶ月も経っていないのに二度も振り回されて。
隼斗の声が最後。
もう真由美に意識はない。

xxxxii

「ん、……うぅぅ」

薄いベージュの天井。
今は消されている凝った造りの照明。

「……ああ、そっか」

家じゃない。
城みたいな所に来て、よく判らなくなって、どうにかなった。
真由美は思考を棄てた。
結局何だ。

「起きた？」

ぱち、と音がして、控えめに照明が点される。
少し離れた所で隼斗が伸びをしていた。

「大丈夫か？」
「あ、うん。……ナントカ酔いはしてません」
「……大丈夫そうだな。それとイズ酔いはあいつにだけ使う」

部屋の隅で、隼斗は湯を沸かし始めた。

「コーヒー紅茶ココアどれがいい？　生憎インスタントしか無いが」
「……ココアでお願いします。ところで私どれくらい寝てたんですか？」
「そうだな、じゅう……」

真由美は予想外の答に驚いてカーテンを開けた。
「じゅ、１０！？」
「……非常に言いづらいが、１４、５時間……」
高い場所にあるらしい部屋の外は、漆黒の帳が降りていた。
「ま、まじですか！！　え、どーしよう私……っ！」
「まず落ち着け、ほら」
真由美は強制的に座らされ、ココアをもたされる。
「本当に大丈夫か？　エドワード、……目崎に連絡は？」
「あ、はい、えっと……これでつきます」
「ああ、助かる。少し借りるぞ」
携帯を差し出す。
今はココアに集中したい。
「……その発信音からすると、片付けでも手伝ってるのか？　何時間経ってると思ってるんだ！　早く引き取りに来いっ、『朝輝の隠れ家』だ、早くしろ！！」
「……お怒りでございますか……？」
珍しく（？）声を荒げる隼斗に、真由美は心なしか退く。
「目崎にな。飲み終えたか？」
カップを取り上げた隼斗は、壁に凹凸として存在する扉の模様を

指す。
「そこから朝輝の所へ行けるから。先に行っといてくれ」
「もしかして、どこでもドア！？」
「……そういう人も居ると思う」
正確には、隠匿型のD種洞だ。
初めての移動手段に心を踊らせて開いた真由美は、
「お、オジャマシマシタっ」
すぐに閉めた。
「どうかした？」
「き、」
「き？」
「きすしーんでしたっ」
朝輝の。
ばたん、と音のする筈の無いドアが開いた。
そして来た。
「よかったよー真由美ちゃん、ゴメンねウチの職業病の兄貴が振り回してっ、揚げ句の果てに投げ飛ばしてっ！　後遺症は？　大丈夫！？」
本人が抱き着いて。
「ぁ、あああああさきさん！！」
「はい朝輝です♪」

『ディック、シルクがこういうの流行りそうだって言ってたけど、どう思う？』
『……どういうのですか』
『ロリっ娘どうしのゆり』
『あ、あなたはなんでそんなカオしてそんなこと言うんですかっ』

僕はやっぱり男女でくっつく方がいいと思うんだけどね、と述べる輝く金髪の王子様。
ただし、サングラスつき。
真由美は疲れを実感した。

「やっぱり譲ってもらうのは間違いだったかな……」
「ううん、代わってもらっててよかったよ。ロキとディックの近くでよかった」

朝輝は本気でそう思っているようだ。

「だってアイツの狙い、真由美ちゃんになってたでしょ？」

xxxxiii（前書き）

遅れました……（泣

xxxxiii

『さて、ドレイルを呼んでくるんだね？』
『無理そうだったらいいよ？　あと姉が大丈夫だったら』
『解った。じゃあね、ジェイン』
『よろしくお願いします』

ばたん、と別の扉が閉まる。
見覚えのある美しい金髪。
昼間、朝輝と居た人だ。

「あさきさん……あのいかにも王子様然とした方は誰なんでしょーか……」
「ルディのこと？　次男だからマレステリマリアルで……ああ、まだリアル王子様だね♪」

あんたはその『リアル王子様』とキスしていたのか、というのは思わなかったことにしよう。
そう真由美は決めた。
かわりに質問をする。

「私が狙いって、どういうことですか？」
「その能力のこと」

黒よりも濃く鮮やかな色が、朝輝の掌に灯った。

「見えるんでしょ？　稀に力を色彩として発現したり目視したりする人がいるってきみもるあも言ってる。普通の人は感じるだけ」

リゾット食べれる？　と言いながら、朝輝はテーブルをセットしている。

「急いじゃダメだよ？　実質2食抜いちゃってるんだから。ディックも食べてって」

「あ、はい、ありがとうございます」

朝輝はかなり料理が好きなようだ。

『リル、呼んだか』

「ロキ、我が姉。早かったね。御大将は呼んでない」

『呼んでないそうだが？　レイグ、どうする？』

お前が引っ張って来たんだろうがッ、と唸る壮齢の男性を連れ、ネイが入ってきた。

『ということで、陸軍三将連れてきたけど、これでいいの？』

元・真由美の隣の銀髪と一緒に、「リアル王子様」が戻ってきた。

「うん、ありがとう。ところでロキくん、審判っぽいやつぷりーず」

わざとなのか、朝輝の英語の発音が有り得ないほど下手だ。

「適当に取っていけ。カードか」

「そう。真由美ちゃん……ターニャ用。いいでしょ？　……あ、むこうでお願いします」

勝手にしろ、と言った彼を引っ張っていく朝輝。

おもむろに新・真由美の隣の金髪「リアル王子様」が口を開く。

『あはっ、思わず、何となく、無意識に、睨んじゃいそうだなー』

そして恐ろしい声を零した。
是非とも幻聴だと思いたい。
のだが、

『完全に意識に上っているじゃないか、凶眼』

新・真由美のむかいによって否定された。
ネイだ。

「凶眼、って」
「僕のこと？」

王子様、にっこり。
凶眼とは、視線だけで物も人も、爆散させる者のこと。

「他人（ヒト）よりちょっと目力強いだけなのにねー」
「そのちょっとがえげつないショウを披露するんだから、恐ろしいものだね」

確かに前科一犯では済まないなと、ネイの隣、レイグと言うらしい男も同意した。

「これが本当の目力（めヂカラ）なのにね。大丈夫だよ、キミもほんのちょっと視力が良いだけ。コンタクト、これが最新のものだから。必要なら使って」

いくつ入っているのか、両手を覆う箱。

遮断用のコンタクトレンズだ。
その上に、一枚のカードが添えられた。
「真由美ちゃんスペシャル完成！　分からなかったらネイに聞いてね」
「ああ、いつでも来たまえ。何が入っているんだ？」
「セキュリティにルディのとにーさんの。本体は私の。プログラムエリアにに名前を言ってはいけない例のあの人の超万能プログラム在中」
「……それは便利だな」

おっと。
ネイが言葉を切り、扉に目を向ける。
ネイだけではない。
ほぼ全員が目を向け、納得したか興味が失せたかのように目を離す。
「来たね。私たちもそろそろ戻るべきかな？」
「大惨事になっていなければ良いが……」

朝輝に連行され、一番近くに居た銀髪の人が扉をあけた。
開けた人に驚くのは、息を切らせた真澄だ。
「エディ逃げてきたの？」
「……そうですっ！」
『リチャード、終業式だが公欠で届けておくぞ。仮眠室を開けよう、一旦寝たまえ。流石に3日貫徹は身体に悪い』
『ありがとうございます……』

上官と兵、もしくは教師と生徒の会話に頷く朝輝。

「さて真由美ちゃん、お帰りですな。血の誓いについて調べてみたら？　じゃあね」
「あ、ありがとうございました！！」

ぐるりと変わる、景色。
これが瞬間移動というものかと喜ぶ真由美。
しかし、

「あ、明るい……」
「地味に時差あるからな……」

現在、午前７時４８分。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6283o/

ROSETTA

2011年9月12日13時36分発行